

基督が使徒等と晩餐を共にせらるゝとき、至聖なる秘蹟を定め、又使徒等と其總ての相續者にマサ聖祭を執行するの權利を與へ給ふた、耶蘇が斯く聖体の秘蹟を定めるに、特に御最期に近き時を御撰びになつたのは、此秘蹟が人に殘し給ふ遺物なるを表し、又人に對する御寵愛の最も深く大なることの證據物たるを示す爲である、又耶蘇は新約の司祭と犠牲たらん爲め世に來り給ひたれば、十字架上に犠牲に供せられて舊約の豫表的犠牲、及モイゼの法的司祭位を廢し給ふの前、新約の至聖の犠牲を日々に獻ぐる爲め是非ともお定めなさるべき聖体の秘蹟と舊法なる司祭位の相續者たる新法の司祭位を立つるに、此御死去の前日が最も適當の時機であつたのである、サテ如何様に聖体の秘蹟を定め給へるか、を大略茲に陳べんに、耶蘇は使徒と與に聖体の豫表たる過越の羔を食して、後聖体なる聖き饗

應を受くるには如何に謙遜と潔白とを要するかを示さんために、親ら使徒等の足を洗ひ給ふた、而て後食卓に着いて麴包を取り、天主に感謝し、これを祝し、割いて使徒等に與へ、「取りて食せよ、これ我肉なり」と、宣ひ、又葡萄酒を盛りたる爵を取り、天主に感謝し、祝して使徒等に與へ、「汝等皆これより飲め、これ我血なり」と、宣ひ、又續いて「汝等此事を吾紀念として行ふべし」と仰せられた、此の「我肉なり、我血なり」との金言は、天主の聖子なる神親ら宣ひたるものなれば、其言に表はるゝ意味は正しく實際に成るのである、麴包と葡萄酒の本質が消滅して唯其形色のみを存し、おれと同時に其形色の下に耶蘇基督の御肉御血が在ますのである、又「汝等此ことを紀念として行ふべし」といふ金言に依て、司祭の權利の廣大高尚なることが知られる、使徒等は此言を堅く收めて、其相續者に傳へた、耶蘇基



督が悪人なる吾等の爲に犠牲となり、信者の爲め糧となるに、其世に在る時に至りて司祭が紀念として耶蘇の爲し給へる如くなし、同じ言を以て麴包と葡萄酒の形色の下に耶蘇基督を造るのである、之を以て耶蘇基督は世の終に至るまで引續いて此の流謫地に在りて吾等の友と爲り吾等の罪の犠牲と爲り、吾等の靈魂の聖糧と爲り給ふのである。

(二) 聖木曜日(イースター)の祭式には種々別格なる所がある、先づ此日は耶蘇基督が聖体を定め給ふたあとを表する爲に何れの聖堂に於てもミサ祭は個々一回執行されるのみである、而して自らミサ祭を執行せざる司祭は普通信者に於けると一般祭主の手より聖体を領ける、これは祭主が耶蘇を表し他の司祭は耶蘇より聖体を授けられたる使徒等を表するのである、

司教在住の聖堂に於てはミサ祭執行中司教が最も大なる儀式を以て秘蹟を授くるに用ふる所の聖油を祝聖する、其聖油は三種に分つ

一は聖公油といふて洗禮後に抹るに用ひ、又堅信の秘蹟、司教の祝聖式、國王の聖別式等に用ふるもの、二は洗禮聖油といふて志願者に洗禮を授くるの前に塗るに用ひ、又品級の秘蹟を授くるに用ふるもの、三は終油の聖油といふて病者に最期の秘蹟を授くるに用ゆるものである、

御受難の節に於ける一切の祭式は耶蘇基督御死去の爲に大なる哀みを表するも、聖木曜日(イースター)のみ大祝日の如く喜悅の特表を視る、是れ此日は聖体の秘蹟が設立せられたる大なる悦びを感じ之を祝する爲に暫時哀みを中止するのである、ミサ祭中榮光の聖歌を歌ふ時悦を表する爲に鐘を鳴らすの例がある、然し此後聖土曜日(イースター)のミサ



の榮光の聖歌までは耶蘇御死去の喪中なるがゆゑに鐘は一截鳴らさぬが例である。

(三) 聖金曜日にはミサが執行されぬから聖木曜日(聖金曜日)のミサに於て司祭は二個の祭酌を祝聖して其一は翌日の祭式の爲に存し置く、而て豫て大祭壇の外に調へたる豫備聖体壇といふがあつて、これは成るべく盛大に裝飾する、ミサが終ると行列を成して大祭壇より豫備聖体壇まで聖体を奉送し翌日の祭式まで此處に安置する、其間信者は御主を慰め且つ其御受難に於て忍び給へる耻辱苦痛を尊敬する爲に晝夜絶えず參詣して拜禮を呈するのである。

(四) 右の行列が終りて祭壇の除飾式が行はれる祭主は助者に伴はれて祭壇の前に至り、ダヴィドの豫言の中の交誦を唱へる「即彼等互に我衣を頌ち我裏衣を圖抽にすと斯くして御受難のことが細に録さ

れてある所の詩篇第二十一を誦しつゝ、祭壇の總ての修飾物、祭壇布等を取り除き、耶蘇基督の空居になつた聖櫃の戸を開けて退く、聖堂内に在る何れの祭壇も悉く斯の如くするのである、由來聖會の比喩的語方に於ては祭壇は救世主の至聖なる御肉体を表すものである、故に該祭壇除飾式は其御受難に於ける哀れなる御有様苦痛裸体の耻辱を受けられたる等のことを最も能く表すものである。

其他又此日所に由りては洗足式が行はれる、これは耶蘇基督が御受難前其弟子等の足を洗ひ給ひたることを記念し且は御主の摸範に則りて謙遜の心を起すために司教在住の教會なれば司教其他にありては司祭中の首位にあるものが十二人の貧賤なるものを撰み其足を洗ふのである。

(五) 該日は斯く大事の行はれたる日なるに依り天主より大恩を票け



たる此日を送るには第一聖体の秘蹟を定め又司祭位を立て給ひたることを深く耶蘇基督に感謝し第二斯くも吾等を愛し給ふがゆゑに聖体の秘蹟に於けるの耶蘇基督を見舞奉つり第三特に夕刻よりは耶蘇御受難のことを深く追想するといふ此三ヶ條のおどを守るのが善良なる信仰的方法である。

第十章 聖金曜日之事

(要略) 第一項

聖金曜日は耶蘇基督の御受難御死去を記念する日なる御受

難の主なる所は祈禱をなし後の死苦を感じ血の汗を流し、ユダの手より敵に附されアンナ、カイファの前に引かれ死刑に處せられ一晝夜嘲罵を加へらて三度ベトロに否まれピラトの法庭に引出され、ヘロデより嘲弄せられ、バラバと同一視せられ鞭打れ茨を冠せられ死刑の宣告を受け十字架を荷ひ釘つけられ死し岩窟の墓に葬れ給ひたる等なり。

第二項

(一) 聖金曜日には聖堂及祭式の状態が共に悲哀と痛悔とを起さしむ、司祭は祭壇の前に暫く平伏す、(二) 過越の羊の犠牲のこと、主の御受難の傳を讀む、(三) 萬民の爲に禱る、(四) 盛大なる式を以て十字架の覆布を取り司祭信者共に之を拜禮す、(五) 聖体を大祭壇に忝しく運び豫備聖体のミサを行ふ、(六) 該日は専ら耶



蘇基督の御受難を記憶し、痛悔を起し、罪人の爲に祈るべし。(七)  
七月の第一主日に耶蘇基督の聖血を祝すること、及五月の三日  
日聖十字架の聖ヘレナに發見せられたるを祝ふこと、(八)主の  
御受難に對して敬虔の心を持ち、且つ勤めを爲すは、大に益あ  
ること、

第一項 耶蘇基督御受難のこと

聖金曜日、耶蘇基督が一切人類のため十字架の上に死し給ひたる聖  
日である、救世てふ玄妙なる大業の行はれたる大なる日である、人  
間に對して天主の無量の愛憐あることが、其御獨子の死去に因で現  
はれ、人間は痛悔して罪を赦され、心を改むべき至聖なる祭日である、  
今茲に耶蘇基督の御受難を委しく記すの餘白はないが、既に他書に  
就て其詳細を讀むた人の記憶を新たにする爲めに、聊か其梗概を陳

へやふ

第一、木曜日の夜九時より十二時まで、にありたるあと、耶蘇は聖体の  
秘蹟を定め給ひて、後弟子等と與に食堂を出て橄欖の森に往き給ふ  
た、耶蘇は其途中に於て弟子等が逃去るべきこと、ペトロが三度まで  
己れを否む可きことを豫言された、既に森の入口に到り給ふや、他の  
弟子等を遣して、ペトロ、ヤコボ、ヨハネの三人のみを園中に連れ給ひ  
「我精神死する許りに憂ふ、汝等此處に止まりて我と共に祈りて寤  
めよ」と宣ひ、彼等を數十歩離れて膝を屈めて、禱り給ふた、曰く「父よ、若  
し可しとせば、此爵を我より過去らしめ給へ、されど我欲する如くな  
らず、汝の欲する如くならしめ給へ」と、耶蘇の祈は愈々久しかりしか  
ば、死せん斗りの苦痛を感じ、血の汗は地にまで滴つた、其時一位の天  
使が現はれて、耶蘇を剛直し奉つた、耶蘇が祈禱を終りて、弟子等の許



へ歸り給ひたるに最早彼等は眠つて居た、耶蘇はペトロに對ひ「シモン、汝は眠れるか、一時も我と與に寤さむる能はざるか、汝等誘試に入らざる爲め寤めて祈れ、心は逸れども肉體弱きなり」と宣ふた、而て再び退きて前の如く祈り給ひ、又歸りてみれば彼等は同じく眠つて居つた、から彼等は何とも耶蘇に答へる言がなかつた、三度目に弟子等の許に來り宣ふに「今は早や眠りて休め、時來れり、視よ人の子罪人の手に賣られん、起きよ我等往かむ、視よ我を賣むとするもの近づけりと、耶蘇が此言の終らざる中に十二使徒の一人なるユダが劔や棒を持ちたる大勢を連れて此處へ來た、而て疊きに彼等に號を爲すべく約したる通り、耶蘇に近ずきて接吻した、此に於て弟子等は怖れて悉く逃げ去つた、耶蘇は惡黙輩に自分の生きるも死ぬも我意の儘なることを示すため、彼等に「汝等は誰れを尋ぬるや」と、彼

等はナザレットのイエズをど答へた、耶蘇彼等に「我なり」といひ給へば、彼等は其威光に打たれて、思はず後に逡巡て地に倒れた、後耶蘇は已を彼等の意に任せ給へば、彼等は直に耶蘇を捕へて之を縛り、大司祭なるカイファの養父アンナの家に連れて來た、  
 第二、其夜十二時より翌金曜日朝の六時まででありたること、アンナは耶蘇に其弟子を教ふことに就いて問ふた、耶蘇答へたまふに「我は公然世に稱へ隠れたる所にて何をも語らざれば、我説きたる所を聴きたる人々に問へ、さらば彼等は我説きたる所の如何を知れり」と之を聴きたる下吏の一人は耶蘇の頬を打ちて曰く「汝大司祭に對し奉りて斯の如き答をなすかと、耶蘇答へて「我言ひたること若し惡らば其惡しきを證せよ、若し惡しからずば何を我を打つや」と宣ふた、アンナは此に於て耶蘇をカイファの處へ廻した、カイファの邸にては兼



て夜半に議員を招集して待受け居りたれば其前に耶蘇を引坐えた所が司祭長等及議會全体は何うでも耶蘇を死刑に渡さむとの手筈を定めて置きたることゆる無理にも耶蘇を陥るべき偽證人を造つてあつた然るに此の多くの偽證人等のいふ處は區々で互に相破る如きものであつた耶蘇は彼等に何を答へ給はなかつた大司祭は困じ果て遂に耶蘇に向つていふ「我神に依りて汝に命す汝は果して神の子基督なるかを我等に告げよ」と耶蘇答へて曰く「然り汝の自らいへるが如しされど汝等に告ぐ此後汝等人の子が神の右に座し空の雲に乗りて來るを見ん」と大司祭は此を聴くや其衣を裂きていふ「彼濱せり何ぞ他に證人を要せんや視よ汝等も今其濱すを聴けり何ぞ他證人を要せんや汝等如何に思ふやと彼等は答へて「彼死に當る」と云ふた

此に於て耶蘇を兵卒と下吏等に渡した彼等は耶蘇を嘲り其顔に唾し拳にて打ち又其目を覆ひ掌にて其面を打ちていふ基督よ汝を打てるものは誰れなるかを云へと斯く耶蘇に種々の耻辱と苦痛とを與へて夜を明した

ペトロは疊きに死すとも耶蘇を棄てることなく共に居るべしといふ約束を爲したことを覺へ前に一度は遁げ去つたが又遠く離れて耶蘇の後に従いて大司祭の中底の内へ來て焚火をして居る者共に交つて居つた然るに大司祭の下婢が見咎めていふ汝はナザレツトの耶蘇と共にありしものならんペトロ憤惶て否みて云ふ我は彼人を知らず且つ汝の云ふ所を解せずと暫くして又他の下婢が見咎めたが其時も同じく否むた三度目に又傍に居つたものが汝は正しく彼等の徒なりといふやペトロは咀ひ且つ誓つて汝等の云へる



此の人を知らずと答へたが其時恰度二度目の鶏の聲を聞いた、ペト  
 ロは豫て耶蘇が汝二度鶏鳴く前に三度我を否まんと宣ふたことを  
 思ひ出し外に出て悔み歎いた、  
 議會は夜明に及んで愈前夜の判定の如く耶蘇の死刑を執行せむた  
 め之をピラトに渡さむと決した、  
 第三、金曜日朝六時より十二時までのこと、ポンシヨ、ピラトといふ  
 のは羅馬の属國とせられたる猶太に羅馬より派遣せられたる奉行  
 である、猶太人等は、大に騒いで耶蘇をピラトの許へ連れ來つた、ピラ  
 トは外に出て汝等此人に對して何の訴を爲さんとするかと問ふた  
 れば彼等は法外にも此者若し犯罪あらずば我等いかで之を汝に渡  
 すべきと答へ、而して偽りの訴をなしていふ、我等此人を視るに我國  
 民を亂し、セザルに貢を納むるを禁じ自らキリストたる王なりと稱

すと、ピラトは之を聽いて耶蘇を白洲に喚出し彼に對して、汝は果し  
 て猶太人の王なるかと問ふた、耶蘇は答へて「汝の言へる如く我は王  
 なり、されど我支配するは此世よりするにあらず、吾此世に來りたる  
 は眞理を教ふるためなり、すべて眞理を好む人々は皆我配下に属す」  
 とピラトは之を聽いて眞理とは如何なるものぞと問ふたが其答を  
 ば待ず外に出て群集に向ひ、我は彼に何の罪あるをも見ずと云ふた  
 所が群集は甚だ激昂して種々に叫び訟へた、其等の中に彼はガリレ  
 アより始めて遍く猶太を説き回り、遂に此處まで來りて人民を唆か  
 し亂したといふものがあつた、けれども耶蘇は何をも答へ給はな  
 かつたからピラトは甚くをどろいた、  
 ピラトは固より耶蘇の無罪を知つて居つたが猶太人の騒ぎを恐れ  
 て其所置に困り果て、居つた所であるから、今耶蘇がガリレアから



來たといふことを聽いて耶蘇をガリラアの國王ヘロデに交附して  
 己れは此事に關係を絶たんと考へたのである、ヘロデは耶蘇が己の  
 所へ引かれて來たのを見て大に悦びだうれば兼て毎々耶蘇の爲せ  
 ることを聽いて居つたから是非親しく不思議の所爲を見たいと思  
 ふたからである、ゾコでヘロデは種々のことをいふて耶蘇に詰問し  
 たが耶蘇は徒らに人を樂ませる爲にあらすと思召て何をも爲さず  
 何をも答へ給はなむだ此に於てヘロデは大に怒り侍臣等と共に耶  
 蘇を卑しめ發狂者として白き衣を被せ嘲弄侮辱を加へて其儘ピラ  
 トの處へ送還したのである、  
 耶蘇がピラトの處へ還されたとき彼れは途方に暮れて其命を助け  
 むが爲にさまざまの方法を回らした、第一は先づ過越の大祭日に於  
 ては猶太人の請願に應じて死刑に處すべき罪人中の一人に特赦を

與ふることが年々の習慣であつたから其例に依てイエズスを免さ  
 んと思ふて已に入牢中なる謀叛強盜殺人をなせの罪を犯したる大  
 惡人バラバと云ふものとイエズス、とを並べ示して何れを免さん  
 かと問ふた、如何に頑迷なる彼等でもよもやバラバを免せとは願  
 はまじとピラトも心竊かに期して居わたのである、然るに群衆は皆  
 叫びて、バラバを助けよ、バラバを助けよといふた、ピラトは其意外な  
 る答に且驚き且怒り然らばキリストといふ耶蘇を如何に處分すべ  
 きかと問ふた、に群衆は益聲を高めて、十字架に釘けよ十字架に釘  
 けよと叫んだ、ピラトは又彼れに何の罪あるかといふたに群衆は愈  
 く騒ぎて十字架に釘けよ十字架に釘けよと叫むた、ピラトは其光景  
 に恐れをなし其心は次第に弱くなりて猶太の習慣に従ひ水を  
 以て群衆の前に手を洗ひていふ、我は此の正しき人の血を流すに罪



なし、汝ら自ら其罪に當るべしと、群集は答へて、其血は我等及び我等の子孫の上に受くべしといひ放つた。此に於てピラトは他の工夫を以て耶蘇を助んと考へ、群集の腹意に耶蘇を鞭うたせ、其残酷な有様を眼前に見するならば、必ず人々の意も柔いで十字架に釘づけすることを思ひ止るならんと、乃で耶蘇を鞭うつやふに命じた。兵卒は耶蘇を柱に縛りつけ鞭にて其御体を打ち、又耶蘇に赤き上衣を着せ、茨にて冠を作り之を其頭に戴かせ、其御手には葦を持せ、而て其前に跪いて嘲つて、アベユデア人の王よといふた、又彼に唾きし其頭を葦にて打ち、尙種々に嘲弄した、かゝる非道なる有様にて耶蘇は外に出でた、ピラトは之を群衆に示して視よ、此人をといふた、然れども猶太人の憎みの心は頑として石の如く、少しも柔らく、氣色なく猶も聲を擧げて十字架に釘けよ、十字架に釘けよと叫ん

で止まぬ、ピラトは愈案外なるに驚いていふ、汝等自ら之を取りて十字架に釘けよ、我は何の罪をも此人に見出さぬと、其時猶太人は、彼耶蘇は自ら已を神の子といふたと、想へた、ピラトは再び彼を尋問したが罪無きことを認め、た依て耶蘇を赦さむといふに、群衆はいふ、汝若し此人を赦さばセザルに忠臣ならず、何となればすべて自ら王と稱するものはセザルに叛くものだからである、とピラトは斯くいはれて愈恐れ終に彼等の願ひに應ひ、裁判官の座に直りて耶蘇に死刑の宣告をしたのである。

第四 十二時より三時までのおと十二時に近き頃、悪黨輩は耶蘇に重い十字架を背負はせ、ゴルゴタ、或は髑髏といふ小山の上まで引立てられた、途中に悪黨輩は耶蘇が十字架の重みに倒れんことを懼れて、シモンといふ人に強て其十字架を荷はせ、た耶蘇は已の苦みを忘



一八〇  
れて其後に従ひ悲嘆の涙に咽びつゝある婦人等を慮め給ふた  
斯くて刑場に至れば、惡黨は耶蘇の衣服を剥ぎ、膽を交たる葡萄酒  
を呑せ、十字架の上に臥させ、其手と足を釘にて打附け、十字架を建て  
其上に「此は猶太人の王耶蘇なり」と録したる刑札を掲げ、其左右に  
は二人の盜賊を十字架に懸けてあつた。然るに司祭長や兵卒や群  
衆のもの等は耶蘇を濱し、頭を振りつゝ、「彼は他人を救ひて自らを  
救ふ能はず、若しイヌラエルの王ならば、今十字架より下りよ、されば  
吾れ彼を信せん、彼は神を頼み、神若し嘉みせば、彼を救ふ可し、彼れ自  
ら我は神の子なりと云ひたり」など口々に嘲り笑ふた。然るに耶  
蘇は却て彼等の爲に祈りていふ、「父よ、彼等は其爲すことの何たる  
を知らざれば、彼等を赦し給へ」と時に十字架に懸けられたる盜賊  
の一人も同じく耶蘇を罵つたが、他の一人は却て後悔して耶蘇に向

一八一  
ひ主よ、汝神の國に至らむ時、我を覚え給へ」と祈つた。耶蘇は彼に答へ  
て宣く、「吾誠に汝に告ぐ、今日汝我と共に樂園にある可し」と  
耶蘇の母、マリアは、我が子の臨終の苦痛を見て、他の忠實なる婦人等  
と又耶蘇が特に愛されたる弟子ヨハネと與に十字架の傍に涙に暮  
れて佇むで居つた。耶蘇は其母に對ひ、「女よ、視よ、汝の子」と又ヨハ  
ネを顧み給ひ、「視よ、汝の母」と宣ふた。これはヨハネが總ての信者  
の代表者となりて居つたから、マリアを我等信者の母として與へ給  
ふの遺言である。  
此時日は未だ高つたが、遽かに四合は暗くなり、地は震ひ、巖は壞れ、聖  
殿内の至聖所の前に垂れたる幕は中途より裂け、墓は開けて多くの  
人が蘇生たなどの不思議があつた。百夫長は此不思議を視て、其心を  
動かされ、胸を打て、耶蘇の神聖なる御者たることを信じた。耶蘇は人



々の其苦死を無にするを悲み給ひて、「我神よ我神よ何ぞ我を捨て給ひしや」と嘆きの言を發し給ふた、

頓て耶蘇は其父に命せられたることを爲し遂げたるが猶一豫言を成就する爲に「我渴」といひ給ふた其時警護の卒は海綿に酢を浸し葦の前に結び付て其御口に捧げた、耶蘇は之を御口に當て給ひたるのみにて「我事終れり」と宣ひ又大聲に叫びて「父よ我靈魂を汝の手に托すと宣ひ終りて息は絶えさせ給ふた

第五 三時より日没までのこと、此に於て猶太人は翌日過越の大祭に死刑者の屍を十字架に遺さる爲め、彼刑人を全く殺して其死体を其日の中に取去るやふに願つた、乃で兵卒が二人の盜賊を殺し果すために其脛を挫いた而して耶蘇をも同じくせむと來て見れば既に死して居つたから脛を折ることを止めたるに一人の兵卒は鎗

を以て其脇腹を衝いたのに、其疵より血と水とが流れた、此に耶蘇の弟子の中アマリアアのヨゼフとニコデモがピラトより耶蘇の死体を取るおとを赦されたれば十字架より下し没薬と蘆薈とを交せたるもの百斤程を以て耶蘇の屍体の腐敗を防ぎ布を纏ひ棺に納めヨゼフの所有する園中にある岩窟の中の未だ人の葬られない墓所の近所にあるを幸ひに其中に假りに葬り奉つたのである。

### 第二項 聖金曜日祭式のここ

一 聖金曜日に聖堂内に入つて先づ目に立つことは其寂寥たる有様である、これ聖會が耶蘇基督の御死去を感じて悲みを表する爲め平常に有る所の修飾は悉く取除かれ、聖体を奉置する聖櫃は其戸を開



かれ、蠟燭臺は勿論平時點火されつゝある常燈明までも消えて、十字架は黒布にて覆はれ鐘や鈴の音の少しも耳に入ることのないからである。聖堂内の此有様を見ることは耶蘇基督の御受難御死去に就て大なる悲みを起し且つ其原因たる我等が犯せる罪の真正の痛悔を起すに足るものである。尙其上此日特に行はるゝ祭式に與かれば一層悲哀と痛悔の心が起る。司祭は黒色の祭服を着用して、修飾もなき、蠟燭の火も燈さゝる祭壇の前に進み出で、其下に至れば一同平伏して暫の間黙然し、其より祭式が行はれる。此祭式は四部に分つ、即ち讀聖書祈禱、十字架の拜禮、豫備聖体のミサこれである。由來此祭式を執行し或は之に與るのは、天主の目前に於て我罪を深く耻ぢ且つ謙遜を以て其赦を願ふの必要を表するためである。

(二) 讀聖書是は聖金曜日祭式の始めに司祭が過越の羔の歴史談を

讀む過越の羔とは舊約時代に於ける過越の大祭に猶太人が羔を犠牲に獻げて其肉を食したることをいふのである。此の犠牲のおとは天主自ら定め給ひてモイゼに教わ以て後に世に來るべき神の御たる耶蘇基督の犠牲を前表し給ふものである。この談を讀むで次にヨハネ福音書中耶蘇の御受難の條を讀み或は歌ふ、信者はこれを立て拜聽する。只首を垂れて息を絶てりといふ聖き言に至れる時一同跪き慎むで吾等のために死し給ひたる救世主を拜し奉るのである。

(三) 祈禱是は聖會が常に已に共同一致したるもの而已のために公禱をなすの定めであるが特に本日限りて此定に逸れて教父司教司祭各階級の聖職者及一般の神民の爲め、志願者の爲め、又天主が世界より一切の迷妄と災禍とを取除き給はんが爲に祈りて後離教者、異端者、惡逆なる猶太人偶像教者などの爲めにも公禱をなすのである。



是本日は耶蘇基督が總ての人間のために死し給ひたれば其御死去を祭るの日なれば如何なる人でも天主の深き御愛憐を蒙り得らるゝといふことを表すためである尤も猶太人の爲に祈をなす時は特別なことがある、それは即他の者の爲に唱ふる參禱文を前には毎に膝を屈むるのが例であるが猶太人の爲に誦する參禱文の前にはこれを爲ぬ、おれ猶太人が耶蘇の頭に茨の冠を戴かせ、其前に膝を屈めて、猶太人の王よ、汝安かれといふて嘲弄したのは惡むべき所爲であることを教ゆる爲である。

(四) 十字架の拜禮祈禱が終れば十字架の拜禮式が行はれる、司祭は先づ黒布を以て覆はれたる十字架を手に持ち祭壇の右方に立ち手にせる十字架の被覆を去り、これを高く揚げて信者よ拜せしめながら「視よ世の助りなるもの、懸けられたる十字架の木を」と誦ふれば

一同は來りて拜むべしと答へる其時皆膝を屈める次に司祭は祭壇の足臺の上に登り、十字架の被覆の右方一部を去り之を高く揚げて聲を高くし前と同一の言を歌ふ三度目に司祭は祭壇の中央に進み十字架の被覆の全部を取り去り一層高く揚げ聲をも更に高くして矢張同一の言を歌ふ、信者も亦た三度共に矢張同じ答をなし同じく膝を屈めるのである次に司祭は豫て祭壇の前に備へられたる紫色の枕の上に十字架を置き履物を脱ぎ少しく隔たりたる所より進みながら三度平伏し十字架の前に至れば耶蘇の聖像の御足に接吻して肅んで禮拜する、司祭が之を爲したる後他の聖職のものは皆同一の儀式を以て十字架を禮拜し、最後に信者は進みて司祭が手にせる十字架に接吻して禮拜を爲す。

該十字架拜禮の式をなすに當て信者は耶蘇基督が御受難の器具た



る十字架に對して最も敬愛の心を起し、又耶蘇が之に釘けられたる原因となりし吾人の罪のために深き痛悔をなすべきである。

(五) 豫備聖体の彌撒聖金曜日(彌撒聖祭)は彌撒聖祭を執行するおどの出來ない日である、其故は十字架上の大聖祭の行はれたる日に於て其紀念たることをなすのみでは却て信者の十字架上の聖祭に對するの觀念を薄弱ならしむるの懼があるから、信仰を深くせしむるに其繼續たる彌撒祭を執行するの必要が無いからである、現今の教會規に依りて見るも本日は何人も聖体を拜領し得られぬ、但死に頻せる病者のみが臨終の聖糧として之を拜領し得るのみである、而て十字架拜禮式の終りて後に行はるゝ祭式が多少彌撒聖祭に似て居るも、眞實の彌撒ではない、何となれば該祭式に於ては司祭が麥醇を祝聖して聖体となす事をせず、唯前日豫備したる聖体を拜領するに止まるのみ

のことだからである、故に之を豫備聖体の彌撒と稱するのである、今茲に豫備聖体の彌撒執行に就て其方式の大畧を陳べやう。

司祭と總ての聖職者は行列を成して前日聖体を奉置せる祭壇に往き、司祭は肅むで之を其手に捧げ、行列の者相與に十字架に對する讚美歌を合唱しつゝ、之を奉じて、恭しく大祭壇に遷し奉る、此に於て司祭は主禱文を歌ひ、聖体を高く揚げて、信者に拜禮せしめ、次に司祭が之を拜領し、默念しながら祭壇を退き、式は此に終るのである。

聖會は、おの簡短なる祭式を以て、耶蘇基督が十字架に懸り、一切の人間、其仇たる人の爲に祈り死して葬られ給ひたることを明かに示すのである、此の祭式に與るものは、須らく肅むで十字架に釘つけられ給ひたる救世主に拜禮、愛敬を呈すべきである。

(六) 本聖日を能く守らむには、朝の祭式に與かるのみでは、足らない篤



信家ならば我心を散らすべき考は總て之を避け只管救世主の御受難のみに思を潜めなければならぬ、即カイファの所よりピラト、ヘロデの所に引かるゝまで、カルワリヨの道より十字架の下まで心を以て御伴し奉り、其交る嘲けられ、ベトロに棄てられ、バラバに比べられ、鞭撻れ茨を冠らせられ、死刑に處せられ、十字架を負ひ釘けられ、死し給ふまでのことを思ひ回らしつゝ、我犯したる罪の赦を願ひ、又特に異教者と悪人等の改心せむことを願ひ奉つるべきである。

(七) 追加の一、聖會は耶蘇基督の流し給ひたる御血を特別に聖び信者をして之を深く尊敬せしむるために七月の第一主日を吾主の聖血の主日と定められた。

又耶蘇基督が死を以て祝聖し給ひたる十字架をも特別に尊敬すべきものであるが之は耶蘇基督の死し給ひたる場所に埋没した、而て

異教者は基督信者が此の聖地に巡拜することを止め耶蘇基督の御受難までも忘れさせやふとて、其所へ淫祠を建て女神の偶像を安置した。後凡三百年コンスタンチノ大帝の母なる聖ヘレナ皇后が右の淫祠も偶像も取毀たせ、地中を掘て三の十字架を發見した。然し其何れが耶蘇基督の釘けられ給へるものなるやが解らなかつたが或奇跡に因て終に知ることが出來た故に聖會は毎年五月三日を以て聖十字架發見を祝するの日とする。

(八) 追加の二、善徳の道に進まむには耶蘇基督の御受難に對して深き敬虔心を有つ程益の多いものはない。試みに其主なる益を擧げんか先罪の爲に痛悔を起し、万事に超えて罪を犯すことを懼れ、耶蘇基督に對する愛を増し、罪人を改心せしむるために奮發心を起すなどである。



耶穌基督の御受難に對する敬虔的勤めの主要なることは十字架或は御受難を感せしむる聖書を室内に飾るゝと屢ミサ聖祭を拜聽すること特に金曜日（金曜日）に當て御受難を尊敬するため祈禱黙想苦業殊に十字架の道行なむをすることである。

### 第六章 聖土曜日（聖土曜日）の事

**（要略）** 一 聖土曜日は耶穌の葬られたるを祭るの日なり猶太人は墓の傍に番兵を置く、弟子等は身を潜めて出ず耶穌の御靈魂は古聖所に到りて古の義人を慰め天國の門が開かるゝの近き

を告げ給ふ、**（二）** 古より本日ミサ聖祭は執行されず此日行ふ祭式は次第に早まりて午前（午前）になれるの習慣を成せり、**（三）** 耶穌の御復活を表する新火の祝別式、**（四）** 復活したる耶穌の肉体の光榮を表する復活の蠟燭の祝別式、**（五）** 本日洗禮を受く可きもの、終りの教訓として舊約全書より稜萃せる十二通の書を讀む、**（六）** 洗禮泉の許に於て盛大に之を祝別し領洗者ある場合にハ洗禮の秘蹟を授け又祭主が司教なる場合に、領くべきものあれば堅信品級の秘蹟を授く而て後諸聖人の連禱を歌ふ、**（七）** 祭式の終りに耶穌御復活の豫表なる喜の特種のミサあり信者は本日靈魂上の復活をなすの覺悟あるべし

**（一）** 本日聖會は御空の御葬を祭る、ヨゼフとニコデモがピラトの許可を得て耶穌基督の御屍を岩窟の墓に葬じり奉つた其時猶太人



は耶穌が三日目に復活との豫言をなし給へることを思出してピラ  
 トの許に至りていふ彼の峻しもの尙活けるとき嘗ていへらく我三  
 日の後に復活と故に三日目まで命じて彼の墓を守らしめよ恐らく  
 は彼の弟子等來りて盜み民に彼は死者の中より復活りたりといひ  
 觸さむ若し去ることもあらば後の迷ひは前よりも更に甚しからむ  
 と乃でピラトは之を許可し墓の傍に番兵を置き且つ墓の入口を閉  
 ぢたる石に封印を施した、  
 然れども猶太人の此懼は無用であつた何となれば弟子等は我主の  
 恐しき苦痛と耻かしき死を遂げられたるに懼れ戦ひて皆身を潜め  
 て居つたからである而て孰れも御主の慈悲の深き其柔和なる其奇  
 跡のことなきを感じて竊に嘆賞に絶えざる有様ではあるか兎に角  
 思はぬ御死去をなされた爲め信仰が挫けて失望落膽に陥て居つた

のである獨り聖マリアのみは其悲痛他の弟子等に勝つて居るが心  
 中には少しも失望せず我親愛の御子の約束が成就せらることを待  
 ちつゝあつた、  
 耶穌の御肉体は岩石の臥床に眠つて復活の覺醒を待ちつゝある間  
 其御靈魂は古聖所に赴き給ふた由來死したるものゝ靈魂の往くべ  
 き所が四個所ある最も深き所は惡魔と大罪人を罰するため消えざ  
 る火の燃ゆる地獄次は洗禮なくして死したる幼兒の靈魂の往くべ  
 き暗所次は天國に入るため未だ完く清淨ならざる靈魂の止まる煉  
 獄次に古聖所があるこの古聖所といふは正きアベルより以來十字  
 架上にて耶穌より「今日我と共に樂園にあるへし」との聖言を受け  
 る善き盜賊まで舊約時代の一切の義人の靈魂が止まりたる所であ  
 る彼等は何の爲め彼處に止まりたるかといふに天の門が一旦罪の



ために贖されてよりは救世主の聖血の功徳に因らなければ開かれぬ故に如何なる聖人でも其時までには古聖所に下りて救世主の來り給ふことを待たねばならぬからであつた。

りれで耶蘇の御靈魂が古聖所に至り給ふ時は凡ての義人が悦び勇むで感謝と敬愛を呈し奉つた彼等は万民中逸早く救世主御受難の功徳を受けて其目前に近づきつゝある救世主御昇天の時其鹵簿に加つて天國に至らんことを希望するの情火に燃されつゝ居るのである。

(二) 本日ミサ聖祭を執行せざるは聖會が古より守つたる例である其所以はミサ聖祭といふものは復活して神の御威光を受けたる救世主の御肉体が玄妙なる犠牲となるの祭であるから其御肉体の呼吸が止つて墓の中に在らせらるゝ間は此犠牲となるの祭を行ふこと

は相應からぬことである故に耶蘇の御葬を記念せむとならば終日黙禱をなすこと却て最も適當であると思ふからのことである而して夕方になれば信者が聖堂に集りて本日の特種なる種々の祭式に與り祈りながら通夜を爲し耶蘇御復活の時を待ちつゝ翌主日の黎明に至り曉の薄明が愈御復活の時の來れるを告れば歡喜の讚美歌の中にミサ聖祭を執行して御復活を祝ひ始めるといふのが古の慣例であつた所が今日に於ては古來の祭式だけは悉く行はれ居るが漸々此祭式の時間を早めて祭式は悉く土曜日の中に行はるゝの習慣となつたのである故に今に於ては耶蘇基督御復活の歡ぶべき時の未だ來らざるにも係らず土曜日の朝より既に御復活の歡喜の報を聴くのである然しながら信者は聖土曜日の祭式の意味を能く解るために土曜日の夕より主日の朝にまで至りて行はれたる古の



慣例を知ることには必要である。  
 聖土曜日祭の儀式は曆年中に於ける最も長き祭式であつた其主なる所は五部に分たれる。  
 即ち一、新火及び香の祝別式 二、御復活蠟燭の祝別式、三、讀聖書 四、洗禮泉の祝別式及び洗禮堅信品級の秘蹟を授くること、五、ミサ祭この五つである。  
 (三) 新火及び香の祝別式、該祭式の大略を陳べむに、先づ聖堂の門外に燧石を以て得たる火と香とを供へ置き、祭主と他の聖務者は聖堂より出で彼の新火と香とを祝別し、後新火の上に香を焚き、又一本の蠟燭に点火する其時助祭は歡びを表する白衣を着用して、藪の上に立てたる三ツの枝ある一本の蠟燭を手にして聖堂に入り、祭壇に進みながら三度足を止める、其止める毎に一ツの枝に火を点じ次第に

聲を高くして「祝よ基督の光」といふ言を唱へるのである。  
 此の祭式の意味を解明して見ると、聖堂内の總ての燈光の消されたるは世の光なる耶蘇基督の死したるを表し、聖堂門外の燧石と香とは聖都エルザレム郊外なる世の光を隠せる耶蘇の岩の御墓と婦人等が香物を携へて聖墓へ到りたるを表し、而て燧石より火の出るが如く耶蘇基督が岩の墓より復活りこれを最も前に知りたるマリヤ、マダレナが弟子等に報らせたるが如く、助祭が石より出でたる新火を燈して信者に告げて其象りを爲すのである、而て又此新火は世を照す耶蘇基督の教を示し、又此新火より三ツの枝ある一本の蠟燭に火を点ずるは、耶蘇が世の人に一体の天主と三位の教を知しめて世の暗みを照し給ふたる意を表するものである。  
 (四) 御復活蠟燭の祝別式、此式は頗る華美に行はるゝもので、先祭壇の



右(みぎ)信者(しんじや)に對つて司祭(しさい)の右手(みぎて)をいふに大なる美(うつく)しき蠟燭(ろうそく)を供へ置き  
 助祭(じよさい)は耶蘇(イエズ)の復活(かくわつ)を告げたる天主(てんし)の如く悦(よろこ)びを表(ひょう)する白(びやく)衣(い)を着(き)て  
 御復活(みかくわつ)の報告(ほうこく)の讚美(さんび)歌(うた)を頌(たた)ふ此(こ)の歌(うた)の意(い)味(み)は天(てん)も地(ち)も聲(こゑ)を合(あ)せて  
 世(よ)の闇(やみ)晴(は)れ眞(まこと)の光(ひかり)世(よ)を照(し)る來(きた)るを讚美(さんび)せむイヌラエルの民(たみ)のエジ  
 プトより救(すく)はれ人(ひと)の罪(つみ)は赦(ゆる)され基督(キリスト)の復活(かくわつ)り給(たま)ひたるを見(み)し此(こ)の夜(よ)  
 は可慶(めでた)哉(かな)晝(ひる)のごとく輝(かが)くといはれたる此(こ)の夜(よ)は幸(さい)福(ふく)なる哉(かな)云(い)々(ん)と  
 いふのである助祭(じよさい)はこの讚美(さんび)歌(うた)を歌(うた)ふに三度(さんど)中(ちゆう)止(し)する處(ところ)がある而  
 て其(その)始(はじめ)の時(とき)は香(か)の五粒(ごつぶ)を取(と)つて十字架(じじい)の形(かたち)に蠟燭(ろうそく)に粘(ね)り次(つぎ)には  
 三枝(さんし)の蠟燭(ろうそく)を以(も)つて御復活(みかくわつ)蠟燭(ろうそく)に火(ひ)を点(てん)じ三度(さんど)目(め)のときには聖堂(せいだう)内(ない)  
 の總(すべ)ての釣燈(ちゆうとう)は同(おな)じく此(こ)の三枝(さんし)の蠟燭(ろうそく)を以(も)つて火(ひ)を点(てん)するのである  
 右(みぎ)の御復活(みかくわつ)蠟燭(ろうそく)と名(な)づくるものは耶蘇(イエズ)基督(キリスト)の御体(みからだ)を表(ひょう)し五粒(ごつぶ)の香(か)  
 はマリアアマレナと他の婦人(よめ)等(ら)が耶蘇(イエズ)の御屍(みがはら)を詰(つ)めんが爲(ため)に調(た)へ

たる香物(かうぶつ)を表(ひょう)しこれを十字架(じじい)の形(かたち)に蠟燭(ろうそく)に粘(ね)けるのは耶蘇(イエズ)の五(ご)の  
 御創(みさき)を表(ひょう)するのである  
 助祭(じよさい)が蠟燭(ろうそく)に点火(てんくわ)する瞬(しゆん)時は耶蘇(イエズ)基督(キリスト)の復活(かくわつ)し給(たま)ひたる瞬(しゆん)時(じ)を表(ひょう)  
 し又(また)耶蘇(イエズ)の聖(たう)き靈(れい)魂(こん)が其(その)御肉(みにく)体(たい)に合(あ)はして光榮(まかほ)ある生命(いのち)を興(た)へたる  
 如(ごと)く御復活(みかくわつ)蠟燭(ろうそく)に五粒(ごつぶ)の香(か)を粘(ね)り点火(てんくわ)されて以(も)つて復活(かくわつ)後(ご)の光榮(まかほ)あ  
 る御肉(みにく)体(たい)なることを表(ひょう)するのである故(ゆゑ)に此(こ)の蠟燭(ろうそく)は御昇天(みしやうてん)の祝(い)日(じつ)  
 では何時(いつ)も祭壇(さいだん)の右方(みぎ)に之(これ)を供(たま)へ置き盛大(せいだい)なる式(しき)のある毎(まい)に之(これ)に  
 点火(てんくわ)するのである但(たゞ)御昇天(みしやうてん)祝日(しゆくじつ)に於(お)いては福音(ふくいん)の「天(てん)に昇(のぼ)り給(たま)ひたり」  
 といふ言(ことば)を歌(うた)ふ時(とき)に之(これ)を消(け)す又(また)聖堂(せいだう)内(ない)の總(すべ)ての釣燈(ちゆうとう)に点火(てんくわ)するの  
 は耶蘇(イエズ)御復活(みかくわつ)の後(ご)十二使徒(じふにし)徒(た)が普(あま)く耶蘇(イエズ)の御復活(みかくわつ)を宣傳(せんべん)へて教(をし)の光(ひかり)  
 を萬國(ばんこく)に輝(かが)したることを表(ひょう)するのである  
 (五)讀(よ)聖書(せいしよ)古(いにしへ)より本日(ほんじつ)大人(おとな)に洗禮(せんらい)を授(ま)ぐるの例(れい)かあつた救世主(きうせいしゆ)が人



の罪を贖ふてからは復活の新生命を受け給ひたる本日こそ、罪の赦を受けて新なる命に生れたるに適當の日である。而て志願者は四旬節中能く教を學び熱心に信者たる勤をなし、愈本日受洗をゆるされるのである。あるうゝあで司祭は先づ聖堂門外に於て彼等志願者に對し洗禮前の式を行ふ。其間聖堂内に於ては信者の心を散らさぬため、舊約全書中より豫言の稜萃したのを読み或は歌ふ。今日に於ては譬い受洗者はなくとも、之を讀むの規則となつた。うれで右稜萃の數は十二ある。是等は凡て洗禮の秘蹟に關係するもので受洗者の最終の覺悟ともいふべきものである。之を悉く讀み終はるまでは随分長時間である。其間其句々の間々に參禱文と讚美歌とを加へる。右十二の讀聖書の大意を示さむに、

第一は(創世記一)天主創世の記事であつて、聖靈が水の面を覆ひ、最初

の事業が成りし如く、惡魔の爲に變性せられたる此事業が今日復た聖靈が水の上に降り救世主の功德を以て再び元の如く改められる。即洗禮に因りて新なる民を造らんとするといふの意である、

第二は(創世記五)大洪水の記事である。水が人を罰する具となつたが、今は却て救はるゝの具とならむ。宮舟に入りたるものゝみ洪水より救はれたる如く洗禮に因りて聖會に入るものゝみ火の淵の崖より救はれむといふの意である、

第三は(創世記二十二)イザークの犠牲の記事である。イザークが自ら犠牲に供せられべく木を負ふて山に登れるは十字架を負ふてカルワリヨ山に登り給ひた耶蘇基督を豫表するといふの意である、

第四は(出埃及記十四)イスラエルの民が紅海を渡りたる記事である。イスラエルの民が海を渡りてエジプトに奴隸たる境遇より救はれ



たる如く、受洗者が水の中に罪を洗めて之より出る時は悪魔の奴隷たる境遇より救はれむといふ意である、

第五は(イザイア書五十四)豫言者イザイアが録されたる如く受洗者は天主より備へられたる水に其渴を醫し調へられたる饗應に其饑を飽かすやふ進めよ且つ受洗者は天主より大恩を受けむとの約束をなすものだといふの意である、

第六(バルク書三)バルク豫言者が録されたる如く受洗者は天主に罪の中より呼出されたるを重じ又現世には名を残したるも全く亡びに致りたる世の權者に反して神の天降りによりて得たる新しき民は迷ふことなく始終も天主の忠民たるべしとの意である、

第七は(エゼキエル書三十七)世の終りの萬民復活の豫言であつて未信者は枯れたる骸骨の如きものであるが洗禮に因りて活きたるも

のとなる此の靈魂上の復活は世の終りに行はるべき肉身の復活の保證であるといふの意である、

第八は(イザイア書四)イザイアの豫言の如く受洗者は其救主なるキリストの名を與へられて風の當らざる物蔭に憩ふが如く聖會の庇蔭に安んじ居らるゝといふの意である、

第九は(出埃及記十二)過越の祭の記事で受洗者は神の羔の聖血に救はれてより其御肉身にて養はれむといふの意である、

第十は(ヨナ書三)ニ、ベの悔改の記事で受洗者は今日までニ、ベの住民の如く迷と罪に沈みたるも彼等が豫言者の勧めに因り悔改て救はれたる如く汝等も使徒等の勧めに因り悔改て今日救はるべしといふの意である、

第十一は(申命記三十一)モーゼがイスラエルの民に對て最終の意見



を陳べたるの章で受洗者はイスラエルの民よりも天主より大なる恩恵を受けたるゆゑイスラエルの民よりも大なる義務を負ふものだといふの意である。

第十二は(ダニエル書三)三人の幼年者がナブコドノゾル王が建てたる偶像を拜するよりも竈の中に投せらるゝを勝れりとしたる記事で聖會に於ては無敵のものが殉教したが今日の受洗者は洗禮を受けむとするとき各自結ぶ約束を破るよりも寧ろ死せむとの覺悟をなすべしといふの意である。

右十二の書は各其終りに唱ふる參禱文の前に膝を屈めるが巴比倫の人々が偶像の前に膝を屈めたることは憎むべきことだといふことを示すために特に第十二の書を読むときに限り膝を屈めずして參禱文を唱へるの例である。

(六) 洗禮泉の祝別式洗禮泉とは洗禮を授くるために用ふる水を備へ置く所である此の洗禮泉の設けなき聖堂は随分多いが是等の聖堂には今陳べんとする所の此式は行ふことが出来ない。

此式は最も盛大で受洗者、聖職者、司祭が行列を成して、イスラエルの民が火柱を以て暗夜に荒野に導かれたるが如く御復活蠟燭を持って侍者に郷導されて洗禮泉の所に進むのである其行進中行列の人々は「ア、神よ鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く我靈魂も汝を慕ひ喘ぐなり」云々といふダヴキドの言を歌ふ既に洗禮泉の下に至れば司祭は參禱文を唱へ後壯麗なる歌の中に人をして新たに誕生せしむるの功力を此水に與へ給はんことを願ひ而て其功力を示すため水の中に手を入れて十字架の形に四ツに切り次ぎに聖靈の功德によりて水より悪魔を防ぎ給はむとを願ふて其上に手を掩ひ三位一体な



る天主の聖名を呼んで三度水を祝し使徒を以て洗禮を萬國に告げ萬民が水に清めらるゝことを表して手を以て水を東西南北に灌ぎ、聖靈が水に其恩恵を下し給はむことを願ふて三度水面に對て息を吹き、耶穌基督がヨルダン河に入り給ふて水を聖からしめ給へることを表して三度一度は一度より深く御復活蠟燭を泉に入れ三度目に底まで沈め、且つ之と同時に「願くは聖靈の功德が此泉の全部に天降らむとを唱へる而て希臘語に聖靈の意味を有する申と云ふ字の形に水面に息を吹く其後右の如く祝せられたる泉より水を汲み之を聖堂の入口に置き、又信者は之を我家に持ち歸りて已或は已が所有物の上に天主の恩恵を需むるために之を用ひる、泉の中に残りたる水は洗禮水となす、司祭が之を祝し終るために聖木曜日にて司祭が聖別せる所の志願者の聖油と聖香油とを水面

に滴らし手にて水と混合せしむるのである、以上の式が終りて洗禮を受くるものがあれば洗禮前の式の總ては既に讀聖書の間に行はれたるがゆゑ、司祭には只彼等に信仰の宣言をなさしめて直に洗禮を授ける而て其靈魂の潔白となれるを表するため白衣を着せ、又信仰の光を表するの燈火を持たせる、本日の祭式を司教が行ふ所に於ては之に引續いて堅振品級の秘跡を授くるの例がある之に依て基督復活の大祭には聖會は、其真正の天配者が御死去せられたる功德のために其靈体の各部分即ち天主の兒女基督の兵士、耶穌基督の司祭等を得るの日である、右の式が終れば今日新たに生れたる新信徒の上に天主の恩恵を要求するため、司祭は祭壇の前に拜伏するから其間は皆諸共に諸聖人の連騰を歌ふのである、



(七)彌撒聖祭本日のミサは昔時は翌主日の黎明に執行せられたことはキリスト御復活の豫報の如き者である此ミサの中に特別の所は種々あるが其主なるものを擧ぐれば司祭が榮光の聖歌を歌ふとき其歡聲が聖堂内に響き渡ると共に總ての聖影聖像の被布は取除けられ三日の間沈黙せる鐘は鳴り如何にも復活給へる耶蘇の榮を表する悦びの風情である書翰を讀むで後祭主は悦ばしき音聲にて三度アレルヤを歌ひ衆皆同じくアレルヤと應へる此言は天主に感謝せよといふ意味であつて七旬節の始めより以來聖堂に一度も此言を聽かざるが本日より耶蘇御復活の歡を表はすため屢之を歌ひ或は讀む福音を歌ふときに侍者は例の如く香を持つが燈火は持たぬ其故は曉に婦人が聖墓に至れるとき耶蘇の御屍を積めんとて香物を持て行きしが御復活に就ての信仰の光は未だ彼等の心を照さな

つたといふあとを表するためである又耶蘇の弟子等が未だ御主の御復活を認めなかつた時であるから信經を歌ふことを除き又耶蘇が弟子等に現はれて未だ平安の挨拶をし給はざりしゆる親睦を表する接吻を爲さず且我等に平安を與へ給へと書きたる神羔誦をも唱へなら

常にはミサの後になす所の晩課は本日ミサ中に加へられてある尤も本日の晩課は大に略されてある故にミサの終りに當りては聖母マリアがエリザベツトを見舞給へる時唱へたる讚美歌を歌ふのである其より後はミサが例の如く終る聖土曜日にて信者が終日心懸くべきことは我心の中に新たなる墓の如く耶蘇のために清かなる住居を闢へ可きあと又耶蘇御復活の祭日には自らも復活むため前以て世間罪愆等に死するの覺悟あるは最も必要なること一の二つ



である。...

### 第十二章 耶蘇基督御復活の聖日

(要略) (一) 耶蘇基督の御復活は一番大なる祝日なり、其所以は御復活を以て救世の事業を成就し、吾人の信仰を堅固にし、吾人の希望に保證を與へ給ふゆゑなり、(二) 耶蘇の御復活は先づ天使より婦人なる弟子等に告げられ、ペトロとヨハネは開かれてある墓のみを見、耶蘇はマリアマグダレナ及び他の婦人等に現はれ給へり、(三) 次ぎにペトロ及び己れの母に現はれ、午時過

エンマウに行く二人の弟子に現はる、(四) 夜集りたる弟子等に現はれ給ふ、(五) 本日信者は耶蘇基督を拜禮し、賞讃し、感謝し、且つ精神上の復活をなすべきなり、

(一) 御復活の聖日は聖會が耶蘇基督の御死去後三日目に復活たまひたるを祝するの日である、耶蘇基督の復活とは、其御靈魂が起きたる古聖所を出で岩窟の墓の中に葬られたる其御肉身に配合して復び活き、御威光を以て墓の中より出で給ひたることをいふのである、御復活祝日は一年中最も優ぐれたる祝日であつて、特に基督教信者の祝日ともいふべき日である、其故に耶蘇基督の復活を以て救世の大事業を成就し給ひ、信者の信仰を堅固にし、吾人の希望の基礎を確立し給ふたからである、

然らば如何様に御復活を以て救世の大事業を成就し給ふたかとい



ふに人間が罪の爲に天の義怒を招き死すべきものと成つたのに耶蘇は其御死去を以て罪を贖ひ給ひ御復活を以て其罰なる死に勝ち、魔鬼の力を全く滅し給ふたである。又其御復活を以て耶蘇基督の全く神なることを明證し吾人が信する教の眞實なることを明かにし給ふたされば吾人は耶蘇基督と其教を信するに就て毫末も疑ふことが出来ぬ程に吾人の信仰の基礎を確立されたのである。尙又耶蘇基督は其御復活を以て吾人が希望することに保証を與へ給ふた何を以て然かいふか元祖なるアダムは人類の頭として一切人間の規範たるものなるがゆゑに其罪を犯したるは自己と共に其子孫なる人類を罪と死の亡びに陥れたるものである。然に耶蘇基督が第二のアダムとなりて元祖アダムの罪を贖ふがために降誕せられた故に基督は洗禮を以て新たに生るゝ人類の頭となり總ての信

者の規範となりたるものである。之を以て御死去に因り已れに入るものを義とせられ、御復活に因り其等のものにも復活得させることとなつた。即世の終りに於て凡ての善人が已の如く榮を以て復活るべき儘かな保証をなされたのである。聖パウロ曰く「死者の中より生るべきもの、最も初めは聖蘇基督なりと。されば世の終りに於て基督信者が御主の如く、肉身に復活り、肉身のまゝ、天堂に榮福を受くるといふことは全く耶蘇基督の御復活に基くものである。吾人の希望に保証を與へられたといふのは即是である。嗚呼斯く耶蘇が惡魔と罪と死とに勝ち、且つ吾人にもこれに勝ち、得せしめられたる此聖き日のことなれば、吾人は眞に喜悅の中に専ら天主に感謝すべきものではあるまいか、天主は本日程大なることを爲し給ひたることは他にない、故に本日は特に主日とも聖



日どもなすべき日である。之を以て本日聖會は左の言を以て天主に感謝する。曰く「これ主の設け給ひたる日なり、吾等は此の日に於て歡び樂む可し」と、吾人は屢之を繰返して感謝すべきである。(二) 耶蘇基督御復活の有様、及本日其弟御子に現はれて如何に其御復活を明かにし給ひたるかを略述せむ、朝にありたること、御主の弟子中或婦人等は金曜日の夕暮に御主の屍が倉忙の中に葬られたるがゆゑに充分手を盡し得られなかつたことを遺憾に思ふて、土曜日の安息が濟みて其日の暮方、種々の香油、香物を買ひ調へて、耶蘇の御肉体を詰めんとて翌日夜の明けを待ち兼て、早くもカルワリヨ山の麓へ赴いた、處が未だ墓まで至らざる中大なる地震があつた。これは耶蘇基督が死に勝ち榮を以て墓の中より出るために前より定め給ひたる刻限即ち三日

目の曉を知らせるものである、其時天使は主人を迎ふる下僕の如く天より下り、墓の入口を閉づる石を轉ばし其上に座つた、耶蘇は既に威光を以て墓の中より出で、墓の中は只光りが充ち残るのみであつた、然し石の上に座せる天使の面容は電の如く輝き、其衣は雪の如くである、墓に番をさせる兵卒共は之を見て怖れ慄き氣を失ふて恰も死人の様であつた、暫くして漸く我に歸り開かれたる墓と其充滿せる光等を見て恐れて町に歸り、委細の様子を司祭長等に報告した、既にして彼の婦人等は墓の許に来て仰き見れば入口の石は倒れ墓は空しきを見た、婦人中のマリアマグダレナは驚き憤て急いでペトロ、ヨハネの所に來りていふ、主を墓より取り去るものあり、彼等は何處に之を置きたるかを知らずと、さて又墓所にては他の婦人等が其の間に墓の中に入つた、所が白



き衣を着たる天使のあるを見て大に恐れしたが、天使は彼女等に向  
ていふ「汝等恐るゝ勿れ、吾れ汝等が十字架に釘つけられたる耶蘇  
を尋ねるを知る、彼は此處にあらす、其自らいへる如く復活りた  
り、汝等來りて彼の置かれたる所を見よ、疾く往きて之を弟子等  
に告げよ、見よ彼は汝等に先ちてガリレヤに往かむ、汝等彼處に  
彼を見む、吾れ豫め汝等に告ぐ」と、婦人等は之を聽いて、懼れや  
ら歡やらに心は乱れ一言も發せず墓を出で、急いで弟子等に告げ  
むとて歸つて來たのである、

ペトロとヨハネはマリアマグダレナの報知をきいて婦人等の歸り  
來らざる前急いで家を出で墓に來たりマリアマグダレナも亦た遅  
れて再び來たのである、ヨハネはペトロよりも先きに奔つて墓の  
傍に來り、見れば耶蘇の御尊骸を包みたる布のみ残りて棺は空し

くなつて居るなれどもヨハネはペトロに遠慮して墓の中には入ら  
なかつた、ペトロが來て墓の中に入り布の疊むた儘に置れたると御  
主の頭に被らせた手巾の同じく疊まれてあるを見た、其時ヨハネ  
も續いて入り、右の状況を見て大に驚き、茲に始めて耶蘇の復活  
らむとの豫言をなし給へることを思出して其復活を信じた、

斯くて二人の使徒は已か宿に歸つたが、マリアマグダレナのみは  
其處を距る能はずして墓の後に泣いて居つた、尙且つ涙ながらに  
墓の中を覗いて見ると、此時二人の使徒に現れなかつた二位の天  
使は御尊骸の置かれたる場所の一位は頭の方一位は足の方に坐し  
て居るを視た、而て彼女に尋ねて「女よ、何とて泣くか」といへば、マ  
リアは答へて「我主を取り去れるものあればなり、之を何處に置き  
しかを知らずといひ振返り見れば一人の立てるを見た、其人又た



彼女に問ふ女よ、何とて泣くか、誰れをか尋ねるか」と然るにマリ  
 ア此人を園守ならんと思ふて泣きつゝいふ「君よ、若し彼を此處よ  
 り取りたれば何處に置きしかを我に告げよ吾之を取らむ」と然る  
 に其人は彼れに「マリアよと呼びだ彼は此一言を聞いて遽かに目の  
 醒めたる如く、其耶穌なるを知りて足許に平伏して「我主よ」といふ  
 た、耶穌いふ我兄弟等にゆきて彼等に云へ、吾は我父即ち汝等  
 の父我神即ち汝等の神に昇る」と、マリアは乃ち弟子等の隠れ家に  
 来て主を見たること、及斯く宣へることを告げた、  
 又先に墓に來りたる他の婦人等はエルザレムに歸る途中に於て耶  
 蘇に逢ひたるが、耶穌いひ給ふ「安かれ」と彼等は進みよりて其御足  
 を抱き之を拜し奉つた時に耶穌彼等にいふ「恐れ、ゆきて我  
 兄弟にガリラヤゆにけと告げよ、彼處にて彼等が我を見む」と

此時使徒等は御主の死去を嘆きつゝ、懼れのため身を潜めて居つた  
 から、マリアマグダレナも其他の婦人も御主の復活を彼等に告げ  
 たが、彼等は少しも信せず、却て悲嘆の餘りに亂心せるものゝ話  
 として之を聞いたのである、  
 (三) 日中に有りたること、耶穌の墓を守ることを命せられたる彼の  
 番兵等は已れ等が親く目撃せる耶穌復活の委細をば司祭長等に報  
 告すると彼等は大に落膽した、けれども此事を是非とも無かつた  
 やふにせやふと思ふて長老等と評議を凝らし、先づ金を以て彼等  
 證據人を賣收せむと決した、乃で澤山に金を兵卒共に與へていふ、  
 汝等町の人々に向て彼が弟子等夜來りて吾等が眠れる間に彼を盗  
 みたりといへど、且つ彼等が斯る詐りをいふて奉行の怒を招かむ  
 ことを恐れしめざるために、此の事若し奉行に聞へなば我等は必



ず汝等のために言ひ解いて安全ならしめんといふた、彼悪黨共が  
 基督の復活を無實ならしめんとするに斯る淺薄なる謀計、眠れる証  
 據人の言の他方法が無つたのである、それで兵卒共は金の爲めに  
 右の如く耶蘇の屍を盗まれたと世間に言ひ觸らした、  
 其日の中に耶蘇はペトロにも現はれて其歎きを慰め給ふた又聖書  
 には記されて無いが御母聖マリアにも特別に現はれ給ふたのに、疑  
 ひない、且つ大抵はマリアマグダレナ、ペトロ等よりも先きに其  
 御母を見舞ひ給ふたこと、思はれる、又耶蘇は其愛する御母に對  
 して一番先きに見舞ひ給ふべき筈である此日の午後クレオファと  
 他の一人の弟子は御主の御死去を悲みながらエルザレムより凡ろ  
 三里許隔たりたるエンマウといふ邑へ往た、其途中に於て耶蘇は  
 旅人の姿にて彼等二人に現はれて道連となり共に往つた、然しな

がら二人の弟子は其人の耶蘇なることを悟らなかつた、耶蘇は彼  
 等に最も親切なる態に問ひて「汝等往きながら互に相語り且つ爰ふ  
 る所あるは是れ何のためや」といはれた、クレオファといふ「エルザレム  
 に旅するものにて此頃彼處に在りたることを知らざるは汝一人な  
 らむ」と耶蘇は「又何の事ぞや」と問ふ、彼等答へて「ナザレットの耶蘇  
 に係はることなり、彼は豫言者にして、行と言にて神と萬民と  
 の前に力あるものなりしが、我司祭長及議員等は彼を死刑に渡し  
 且つ之を十字架に釘つけたり、然れどもイスラエルを救ふべきものは  
 必ず彼なるべしと望を屬したりしが、今日は是等の事ありてより既に  
 三日目となれり、然かのみならず我等の中なる女等は我等を驚かせ  
 り今朝未明に墓に至りしに彼が屍を見ざりと報じ且ついふ、自ら  
 御使の現れを見たるに彼は活くと告げしと、又我等の中なる誰々



も墓に往きし時女等の云ひたる如くなるを見終に彼をば見出さ  
 りし」と其時耶蘇答へていふ愚かなるかな、豫言者等の總て説きた  
 ることを信するに心の遅きものよ、キリストは斯る苦しみを受け  
 て而て其榮に入るべきに非ずや」と、且已に就て聖書に記されたる  
 總てのことを説き給ふた、彼是する中エンマウに近づいたが耶蘇  
 は前に往かふとする様子を見ゆるから、二人は強て之を止め、日  
 も既や傾いたれば今夕は是非に彼等と同宿せられよといふて已が  
 宿に招じた、やゝありて晚餐の食卓に就き耶蘇に上座をば譲つた  
 然るに耶蘇は麵包を取りて之を祝し、割て彼等に與へた、其様子  
 が如何にも耶蘇が生前其弟子と食を共にせらるゝ時に酷た肯て居  
 つた、此に於て彼等二人は始めて眼の醒めたる如く彼の耶蘇なる  
 を認めたとすると耶蘇は忽ち彼等の眼より消去られ給ふたのであ

る  
 二人の弟子は互にいふ「彼れ途にて語り且つ聖書を我等に解明し給  
 ひたるとき何とて我等の心は熱せざりしかど斯くいひつゝ、直に家  
 を出てエルザレムに歸り、弟子の集會せる處に往き、耶蘇が如何に  
 已等に現はれ給ひたるかを告げたのである。  
 (四) 其夜ありたるおと、エンマウの彼の二人の弟子は其夜他の弟子等  
 に今日ありたること共を語り終るや否、戸締りあり其室内に何處  
 をも開けずして耶蘇は突然に現はれ給ふて彼等の中に立ちていふ  
 「汝等平安あれ、我なるを恐るゝ勿れ」と、されども弟子等は驚き怖  
 れて個は幽霊ならむと思へり、耶蘇は彼等を静めむとていはるゝ  
 やふ、「汝等何をか驚くや、何とて汝等の心に疑ひ起るや、我手と  
 足を見よ、我なり撫で、見よ、汝等が見る如き肉と骨は幽霊にあ



ることなし」と仰せられ其手と足を彼等に示し給ふた然し弟子等は悦びの餘り未だ怪むで居るから、耶蘇は其疑を全く晴させむがために汝等此處に何か食すべきものあるか」と宣ひたれば弟子等は一片の炙魚と一房の蜂蜜とを呈した、耶蘇は彼等の前に之を食し又其餘を彼等に與へ給ふて且ついふ我汝等と共に在りし時、汝等に告げたる言は之なり、曰くモイゼの立法中にも豫言者の書中にも、詩篇中にもすべて我を指して記したる所のことは必ず成就せざるべからずと、故に斯の如くキリストは苦みを受けて三日目に死者の中より復活らざるべからずと、耶蘇は斯く話し給ひて彼等に息を吹き又いふ、「聖靈を受けよ汝等誰の罪を赦すもろは赦され、汝等誰の罪を赦さるもそは赦されざるべし」と仰せられて使徒等に罪を赦す權を與へ給ふた、

如上の通り耶蘇の復活給ひたる日に許多の證據を以て弟子等に己の復活を明かにし、且つ其歎きを慰め給ふた尙天にのぼりて、其聖父の右に座し給ふまでには多くの人々の前に同じく之を明にせられたのであるが右に陳べたるは其日の中にあつたただけである。(五)斯く不思議のことを爲し、罪の赦、肉身の復活なる大恩を我等に得せしめ給ふたから、主が設け給ひたる此聖日に於て凡ての信者は我救主に對して特別の務をなすべきである、先其主なる務は四つにして、第一マリアマグダレナや他の弟子の如く愛に炎ゆるの心を以て復活り給ひたる耶蘇を拜むこと、第二罪と悪魔と死とに勝つことを得たるがために歡喜を以て救主を讚美すること、第三耶蘇は其御復活を以て我等靈魂の助りと肉身の復活を得させ給へる大恩を深く感謝する事、第四耶蘇が復活り給ふと同時に我等も精



神しん的てきに復たが活げるの恩めぐみ惠みを願ねがふことである、  
 精せい神しん的てき復たが活げといふものは凡まての信うん者じやが耶イエ蘇ズ基キ督トの御ご復たが活げを祝しゆくする  
 に於おて求もとむべき功かう果くわである、耶イエ蘇ズ基キ督トが死し給たまひて、前まの饑うき命いのち  
 を捨すて、苦くるみと艱なみある肉にく体たいを捨すて、罪つみ人びとの姿すがたを捨すて、永とこ遠とほの生いち  
 命ち、榮さかの肉からだ体たい、聖せい寵ちゆうと幸かう福ふくとを着ちやくしたるものと成なり給たまふた、吾われ人ひと  
 も此この摸も範はんに則のつりて、四し旬じゆん節せつのあひだに罪つみを贖あがひ、洗せん禮らい或あるは悔くわ悛しゆんの秘ひ蹟せき  
 を以もつて罪つみを棄すてたるからは、本ほん日じつは新あららし生せい活くわつに由よつて活いきるもの  
 となるべきである、傲がう慢まん憤ふん怒どに代かへるに謙けん遜そん柔じゆう和わを以もつてし、邪じや淫いん  
 餐たう食しよくに代かへるに潔けつ白はく節せつ制せいを以もつてし、貪たん婪らん吝りん嗇しやくに代かへるに慈じ善ぜん大たい量りやう  
 を以もつてし、懶らん惰た不ふ忠ちゆうに代かへるに熱ねつ信しん忠ちゆう實じつを以もつてすべきである、斯かくの  
 如ごとく精せい神しん的てきに復たが活げしたるものゝみ世よの終おひに耶イエ蘇ズ基キ督トの如ごとく復たが活げ  
 することを望のぞみ得える、殊ことに又また真ま誠しんの喜き悦えつを心こころの底そこより評ひやうし得えるも

の即すな真は正ちんに救すく主しゆの復たが活げを祝いひ得えるものは已おのれの精せい神しん的てき復たが活げをなし  
 たるものゝみである。

第十三章 御復活の期節

(要略) (一) 御復活聖日より三位一体の主日までの間を御復  
 活の期節といふ、御昇天までは耶蘇は屢弟子等に現はれ給  
 ひ、就中御復活の八日目のタエルザレムに於て、其他ゲエネ  
 ザレットの湖畔に於て、ガリレヤの山上に於て等なり、(二) 聖  
 會の命令に因りて御復活聖日後前後二週間内に聖体を領す



べき義務あり、耶蘇基督の御死去と御復活の功徳に因りて得たる新しき生命を守るために聖体を領るを要す、(三)此新生命に於て忍耐するもの、み眞實に歡ぶ事を得、アレルヤ、天の元後の祈禱等は此歡びを評す。

(一) 耶蘇基督の御復活を祝するとは其日のみに限るに非ず、聖會は三日間之を盛大に祝ひ、又八日目の主日までは他の總ての祝を中止して御復活のみを祝するのである、尙又三位一体の主日に至るまで五十六日間は此を御復活の期節と稱へて信者たるものは御復活に關する悦びの中に送るべき時節にするのである。

耶蘇基督が御復活なされて此世に止まり給ひたるは四十日間で、其間屢々子等に現はれ、彼等と相語り、食事を共にし給ひしなどの事があつた、又其中に彼等を慰め、其信仰を堅固にし、聖會のことを説き、彼

等の將來のあとを豫言し給ひたることもある、耶蘇が其弟子等に現れ給ふたことは屢であつたが、一度は五百人許に現れたことがある、今其中二三回だけを擧げやふ、

御復活の八日目に當て弟子等はエルザレムの或家に集り、潜むで居る所へ現はれ給ふた、之より前、耶蘇が使徒等に現はれ給ふた時、トマ一人は居らなかつた、依て弟子等は後にトマに向て我等は主を見た、と告げたけれども、彼は之を信せず、誓ていふ、我は彼の手に釘の痕を探り、且つ彼の脇に我手を入るゝに、あらずば敢て信せじと、然るに八日目の現はれた時は、トマも亦た彼等と共に居つた、さうして戸の閉じてあるまゝ、耶蘇は來りて、彼等の中に立ちていふ、「汝等平安あれど、其よりトマに對ていふ、汝の指を此に入れて、我手を見よ、汝の手を延べて、我脇に入れよ、信するに吝かなる勿れ、能く信せよ」と、トマは之を



見て直に我主よ我神よと答へた。耶蘇又いふ「トマよ汝は我を見たるに由りて信せりされども見ずして信じたるものは幸なるかな」と。其後又使徒等がガリラアに歸り以前の如くゲネザレツト湖に漁りをして居たが一日ペトロヨハネと他の五人の使徒が共に漁りに従事して終夜を明したが何を獲る所が無かつた。黎明になりて耶蘇は岸に現はれ給ふたが誰も耶蘇なることを認めなかつた。然しながら耶蘇の指揮に従て網を引き揚げることに能はぬはと澤山に漁があつた。其時ヨハネは岸に居る人の耶蘇なることを前に悟つてペトロにいふおれ主なりと。ペトロは之を聴くや其熱信に取り乱れて惶慌て下着を纏ひ海中に飛び込み泳いで岸に達した。彼是する中他の弟子等も網を引きつゝ舟にて岸に着いた。一同耶蘇の許に到れば既に炭火の上に魚を炙り又麴包も供へてあるを見た。耶蘇の勧めに由り網

の中にある魚を數ふれば大なるものが百五十三尾である。この不思議なる大漁に驚いて誰れも皆な黙して食するのみで敢て耶蘇に言を交すものはない。食し終れば耶蘇はペトロに對ていふ「ヨハネの子シモンよ汝は彼等よりも勝れて我を愛するか」と。ペトロ答へて然り主よ我が汝を愛するは汝の知り給ふ如し」と。耶蘇乃ちいひ給はく「我が羔を牧せよ」と。又耶蘇が重ねてヨハネの子シモン汝は我を愛するか」と尋ね給ふた。ペトロ又然り主よ我が汝を愛するは汝知り給ふ」と答へた。耶蘇再び「我が羔を牧せよ」といひ給ふ。三度目に又耶蘇が「ヨハネの子シモン汝は我を愛するか」と問ひたれば、ペトロは大に愛へたる体にて答へるに「主よ汝は知り給はざる所なし、我が汝を愛するを知り給ふ」と。耶蘇此三度目の答を聴き「我が羊を牧せよ」といひ給ふた。其より亦ペトロに告げて「眞に眞に汝に告ぐ、汝若かりし時には自ら



帶して其欲する所に歩みたり然れども老ひたらむ時には汝手を伸  
 べん而して民汝に帶し汝の欲せざる所に引かむ」と仰せられた斯の  
 如くペトロが三度の信仰の宣言を以て三度の否みを購てから信者  
 と牧者の上に權利を授けられたのであるさうして耶蘇の代理たる  
 職務を帯びて後御主の如く其手足を十字架に縛せられて現世を去  
 るに至るべきことを豫言せられたのである、  
 其後又十一人の使徒等は耶蘇より指定されたる山に至れば此處に  
 耶蘇は又現はれ給ふた使徒等は之を見て拜むだ耶蘇は彼等に近寄  
 給ひていふ天にも地にも凡ての權は我に賜はれり故に汝等行きて  
 萬國民に教む父と子と聖靈の名を以て彼等に洗せよ凡て我が汝等  
 に命じたる所を悉く守るべきことを彼等に教む見よ我れは世の  
 終りまで日々に汝等と共にあるなり」と

耶蘇基督は斯く己の復活したことを明白にし斯く天に昇る前に使  
 徒等の信仰を堅固にして聖會の基礎を確め給ふた、  
 (二) 御復活日の頃には聖會の命令に由りて凡ての信者は聖体を領く  
 べき特別の義務がある此務は最も重大であつてこれを怠るときは  
 信者の位置より落つるものと見做るるほゞである此の務を果すは  
 御復活聖日の前後一週間ツ、即二週間の猶豫を與へられてある故  
 に大なる障害無い限りは必ず此間に聖体を領けねばならぬ若しも  
 其間、領くことを得られなかつたものは此時節に近い前後に於て  
 聖体を領けねばならぬ病氣なれば司祭の意見に因りて此日限の後  
 まで聖体を受くことを延引し得るが此務をかくことは得られぬ  
 故に長病に罹つたものは自宅に於て此務を果すべきである、  
 御復活の時に聖体を領くべきことは假んば聖會の命令か無いとし



ても特に其理由がある、イスラエルの民がエジプトの奴隷たる境遇を脱したることを記念するために羔を犠牲に献げてから其肉を食する例で有たエデア人がエジプトより救はれたことは吾人が耶蘇基督の御死去を以て罪の連鎖を解かれ悪魔の奴隷より救はるゝこととの豫表であつた、過越の羔はカルワリヨ山上に犠牲に献げられたる神の羔たる耶蘇基督を表するものであるされば耶蘇基督の犠牲のために罪を赦され其御復活のために新しき生命を得、又其生命を堅固にするやふ耶蘇基督に背り、我靈魂をして天堂の榮福を得せしめ我身体をして榮の復活に至らしめむために犠牲に献げられたる神の羔の肉を食するには御復活の時は最も好適の期節ではあるまいか、嗚呼御復活の時新しき人間となりたる吾等は何時までも軀を清く心を聖に持せむ爲めには犠牲に献げられたる潰れなき主の御

肉身を屢拜領するの他道はないのである。

(三) 御復活の時に精神的復活をししても若し又間もなく罪を犯したる時の生活に戻るならば救主の恩義に背むくことは以前よりも更に甚しきものではあるまいか、耶蘇基督は復活し給ひてから最早死することはない故に耶蘇基督と共に復活した信者は清らかなる生活に忍耐し持続すべきものである、而て此忍耐あるおどが如何なる徴に由りて分り得るやといふに其主なる徴は三ある即ち罪を一心に忌嫌ひ世間の財寶と娛樂を輕んじ、天堂の榮福のみを一向に望む、といふことである、此三つのことを全く行ふものは何時までも御復活聖日の如く心の底より歡樂に充たされ現世より既に天堂の永遠の悦びを豫味することが出来る、

聖會は清らかなる生活の効果である所の歡喜を表はすために御復



活くわつの期き節せつ中ちゆう屢るいアレルヤといふ言ことばを用もちふる此この言ことばはヘブレア語ごにして  
 『主しゆを感かん謝しゃせよ』といふ意い味みの含ふまれたものである又また聖せい會かいが御おん告つげの祈いのり  
 の代かりに其その御おん子ごの御ご復ふく活くわつのために感かんじ給たまふた聖せいマリアの歡よろこびを祝しゆく  
 して天てんの元げん后こうの祈いのりを立たちて唱となへしむるの例れいあるは是これ亦また矢や張はり歡よろこ喜び  
 を表ひすためである。

第十四章 耶蘇基督御昇天の大祝日

- (要略) (一) 會聖は御復活後四十日目に耶蘇基督の御昇天  
 を祝ふ、 (二) 耶蘇基督は御昇天に於て功の報を得人として

神の位に擧げられ萬民の王と定めらる、 (三) 吾人の頭たる  
 がゆゑに吾人が天に入るの特權を與へ、天堂に入る約束を  
 なし、又吾人のために絶えず取次をなし給ふなり、 (四) 天堂  
 に入るには其望みを起すと同時に耶蘇基督を手本となすべ  
 きなり、 (五) 本日より使徒等の如く聖靈降臨を待つ覺悟  
 をなすべし。

(一) 聖會は御復活聖日後の四十日目に耶蘇御昇天を祝する、耶蘇基  
 督は素より天主の聖子に在すのであるから、神の性からは天にも  
 地にも何處にも在す、故に天に昇り給ふと云ふのは神としての義  
 ではなく、世を救ふために受け給ひたる人間としての靈魂肉身を  
 以て天に昇り給ふたといふ義である、  
 耶蘇御昇天の有様の大要を陳べむに、使徒等はガッレアよりエル



ザレムに歸るや耶蘇は屢彼等と神の御國のことを語り給ひ、御復活後四十日に耶蘇は又使徒等を集め、彼等と打連れてベタニアに赴き、往々語り給ふやう「汝等エルザレムを離れずして我に聽ける所の父の約束し給へることを待べし。今はヨハネは水を以て洗したれども汝等は久しからずして聖靈に依つて洗せらる可ければあり、「中路」汝等に望む、聖靈の功德を受けてエルザレム、エデア全國、サマリア、地の極まで我が證人となるべし」と、斯く語りつゝ、橄欖の森まで來たならば、耶蘇は手を舉げて使徒等を祝し、彼等の上に手を伸べながら其目前に地上を離れ次第に天に昇り給ふた、使徒等は仰いて御主を目送る中に雲に隠れ見えなつた、其時白衣を被た二位の天使は現はれて使徒等にいふ「ガリラア人よ、何故天を仰ひで立つや、汝等を離れて天に擧げられたる

耶蘇は、彼れの天に昇るを視たる其如く又來らむ」と、此に於て使徒等はエルザレムに歸り、樓に集り耶蘇の母マリア及他の弟子と共よ心を合せて御主より約束せられた聖靈の降臨を待ちつゝ居た、  
 耶蘇の御昇天を現はすため本日のミサに於て天に擧げられ神の右に座し給ふといふ言を歌ふとき、御復活し給ふ耶蘇を表する所の彼の御復活蠟燭を消すの例がある。  
 (二) 耶蘇基督が何故斯く天に昇り給ひたるやといふに、第一の理由は聖父より其働きと苦みの報賞を受け、戦ひに勝ちて凱旋するためである、  
 エルザレム聖殿には至聖所と稱する所が在つて、其前面には幕を垂れて誰人も之より中に入ることも見ることも得られなかつた、



此の至聖所は罪のために鎖れて誰人も入ることの出来ぬ天堂を表  
 するものであつた、それで聖殿内の至聖所は大司祭のみ一年一度  
 入ることを得る、而も其前には己の身を潔め、犠牲を献げ其血を  
 手に提げて入らなければならぬ定めであつた、而て天堂は此のエ  
 ルザレム聖殿の至聖所に優ること實體の影に優るが如きものであ  
 る、故に何人も素より入ることを得られなかつたが、御主が本日  
 人間の爲に流し給ひたる血を手提げ、受け給ひたる創を持つて  
 眞正の至聖所なる天堂に入ることを得たのである、  
 又耶蘇基督が天に昇りて「全能の父の右に坐し給ふ」とあるのは、既  
 に天に入り給へば耶蘇が受けたる權昇りたる位は天主と同一であ  
 るといふのである、即ちダウイドの豫言にも「主、吾主に宣はく、吾  
 れの右に坐す可し、中略汝は吾れの子なり、中略」吾れに求めよ、されば

汝に諸の國を譲りとして與へ、地の極を汝のものとして與へむ」と  
 ある、

然し御主が斯の如く天に昇り天の中に高く擧げられ、天主より萬  
 民萬國の上に全權を與へられたのは其神の性としてはいはない、耶  
 蘇基督が神としては素より聖父と同位同權で、聖父と共に永遠無  
 窮に全能なる萬物の主である、故に天に入り天主と同位同權にな  
 り天主の右に坐し給ふたといふのは人としての耶蘇基督である、  
 而て耶蘇基督の人性が斯くまで高く擧げられて神の性に與りたる  
 所以を尋ねれば、耶蘇基督は神人両性の一位的合體のために、其  
 人性は神性に引揚げられたものである、故に耶蘇の爲したる總て  
 の所爲、其忍びたる總ての苦難、其耐えたる十字架上の死去等は  
 神の爲したる價值あるものである、即無限無窮の價值あるもので



あるから、天の門を開き天に於て神の位に昇り、神と同位同權を受くるに至つたのである、  
 嗚呼耶穌基督の御昇天、天の最上まで引揚げられたことの盛大なること堂々たることは何に例へやふ、彼のエノクとエリアの如く他の力に依りて天に上りたるものでない、已れの力に依りて上り、舊約時代の凡ての義人の靈魂は吾が救済者として之に伴ひ奉り、天堂の凡ての天使は喜悅の讚美歌を以て之を迎へて我王と頌へ、非常なる苦難と耻辱を以て獲たる天國に凱旋して最高所に至り、人を救はむがために受けたる創を天主の尊前に具し、惡魔が開關以來萬民の權利を挫きたることを陳狀し、主なる聖父は其首に榮の冠を戴かしめ、死去を以て惡魔の手より救ひ出せる萬民の永遠の王とし吾が右に坐せしめ給ふたといふことを。

(三) 耶穌基督が御昇天せられ給ふたのは、雷に已れの榮と福を得るためのみでなく、吾人にも歡喜と希望を起させ給ふためである、何故なれば耶穌が天の門を開き給へるは吾人に其中に入るを得させむためである、天に昇り給へるは吾人に其中に居所を備へんためである、又天に於て無窮の幸福を聖父より得たるは、これを吾人に分ち與へんがためだからである、  
 これは即ち耶穌が世に來りて人間の頭となり、洗禮を以て超性の生命を受けたるものを御自身の妙體に容れ給ふた結果である、其の御苦難御死去を以て妙體を清淨にし、御復活を以て吾等に復活せしめんとすの保證をなし、御昇天を以て共に天に入るの特權を與へ給ふたのである、耶穌基督は素より天主の聖子なるがゆゑに天主の相續者であるされば聖蘇が天主の子たることを我等と共にし給



ふからは同じく天主の相續者たる權をも共にし給ふ筈である。而て公審判の時までは靈魂に就いてのみ天堂に於て天主の榮を分け給ふも、公審判の後には我等も耶蘇の如きものと成つて靈魂にも肉體にも天道の榮と幸を受くべきものである。

我等が天に於て耶蘇基督の幸福に與かるべきとは、主自ら成し給へる約束に因つて確實なるとである。其多くの御約束の金言中一つだけを挙げむ「吾父の家には居室多し、中略我は汝等の爲に所を備へに往く、吾れ若し往きて汝等の爲に所を備なば、又來りて汝等を吾れに取り、吾がある所に汝等をもあらしめんとす」と、(ヨハネ傳十四章二節乃至三節)尙ほ我等をして天堂に於て備へ給ひたる居室に入るの價値あるものとせしむるため、耶蘇は我等のために始終聖父に取次をする代願者となり、仲保者となり、大司祭となり、我等のために受け給

たる御創を聖父の前に表はし給ふて、其御創が絶えず罪人のために憐を請ひ善人のために深き寵愛を願ふ、雄辨なる舌の如きものとなるのである。聖ヨハネいふ「基督は我等のために請願せんため絶えず生きるなり」と

嗚呼吾人が此の涙の谷に追放されて居る間之よりも喜悅と希望と慰宥と力とになるものが有るであらふか、其聖父の許に限なき寵愛と信用とを得給へる耶蘇基督が親ら吾人の救助のことを引請け給ふからは吾人は全く安全ではあるまいか。

(四) 本日(今日)を聖にして御昇天の玄義の功果を得んとならば、信者が特別に爲すべきことが三あつる。第一は凱旋して天に昇り天堂に於て聖父より無上の稜威を受けたるために御主を祝すること、第二は我等のため居室を設け永遠の福樂を備へ給ひたることを深く感謝する



こと、第三は我等が眞の古郷たる天堂に往く深き望みを起すといふことである、而て耶蘇基督が昇天せられ天堂の榮と福樂を受け給ひたるとは其總ての御働、其御受難御死去のために積むだ無量の功の報ひである故に我等も天に昇るの望みが無効とならぬ爲には同じく耶蘇基督の如く功を積まなければならぬ、耶蘇基督が總ての信者に己が福樂を頒與へるの約束をなし給へるも其約束は條件が附せられるものである、即「正義に由りて戦ひたるもの、み冠を戴かん」(ポーロ)といふてある、耶蘇基督の清らかなる生活を模範として罪を犯ざるもの、み得らる、のである、耶蘇基督の謙遜、柔和、慈悲、忍耐等の諸徳に倣ふために我人は日々辛苦、病難等を忍ばねばならぬ、「弟子は其主に勝るにあらざれば」(ヨハネ)基督は先に苦みを受けて其榮に入り給ひたるゆゑ、吾等も共に苦めは、共に榮を受けん」としてある。

(五) 追加 耶蘇基督は御死去の前より約束せられて宣く「吾れ父に請はむ、而て父は他の慰め主を汝等に與へこれをして永久に汝等と共に止まらしめむ」と、尙御昇天の前に此の慰め主即ち聖靈の來ることの近かるべきを弟子等に告げ給ふていふ「汝等エルザレムを離れずして吾れに聽ける所の父の約束し給ひしことを待つべし、其はヨハネは水を以て洗したれども、汝等は然らずして聖靈に依りて洗せらる可ければなり」と、而て弟子等は斯く聽きて皆エルザレムに止まり、樓の中に聖母マリアと共に集りて心の安全の中に絶えず祈をなし、聖靈の降臨を待ちつゝあつた、されば信者たるものは本日より十日目の聖靈降臨の聖日に至るの間、良き覺悟を爲したならば、聖靈の恩恵を受け、智慧は照され、心は強められ、靈魂は清められ、聖寵は増すであらふ故に、此十日間は使徒の



如く聖靈の降臨を受くるの覺悟をなせば其聖日に於て大なる効果を得らるゝ然らば如何にして覺悟すべきや先づ使徒等の如く成るべく心を乱すべき總ての事を避け心の平安を保つことである又使徒等が絶えず祈りたるが如く祈禱を屢なし且つ常に勝りて慎みを加へ使徒等が耶蘇の母マリアと共に祈りたるが如く我等も聖母と心を合せ聖母の御心が聖靈に充たされたる如く我が心も聖靈に満さるゝやふ其傳達を願ひ清淨謙遜熱信になるやふ頼むことである此覺悟をなすに就ては教皇より定められた數多の贖宥が附いてあるされば九日間聖堂若くは自宅に於て祈禱をすることは最も善いことである。



### 第十五章 聖靈降臨の聖日

(要略) (一) 聖會は御復活の五十日に聖靈が使徒の上に降臨し給ひ彼等を以て世に教を諭し始めたことを祝ふ (二) 聖靈は使徒等に教旨を満足に悟るの智慧之を弘めるの勇氣世に善徳の模範となり得るの恵みを與へ給へり (三) 聖靈は聖會が誤謬に陥らざるやふ絶えず之を照し倒れざるやう絶えず之を清め給ふ心の平安と祈りを以て聖靈を受くるの覺悟ある信者は其靈魂を漸々照し強め清め給ふ本聖日に於ては聖靈が吾靈魂に來りて聖旨に適はざることを爲さしめざらむことを願ふべきなり。

(一) 御復活後の五十日は主日に當る此日を聖靈降臨の聖日といふ



聖會は本日聖靈が使徒等の上に天降つたことを祝する。聖靈は彼使徒等の心を改善し、彼等をして教を弘め、耶蘇基督の證明者たるに適せしめたのである。されば耶蘇基督に立てられたる聖會は聖靈の御降臨を以て完全にせられたのである。此日は當時のユデア人がシナイ山に於て天主が舊約の立法を發布し給ふたことを記念する日であつた。舊約の立法は石の板に刻されたが、聖靈が新約の掟を發布するには使徒の心の中に銘刻し給ふた。彼の舊法は畏法であつて、此の新法は愛法である。彼は既に廢されて今は愛法のみ世に行はるゝ。嗚呼、實に本日は聖會の上に又聖會を以て萬民の上に聖靈の恩寵を充分降し給ひたる日であれば、吾等は心に喜悅と感謝と愛の溢るゝ日である。されば茲に聖靈が如何様にして降臨し給ひしやの大略を陳ぶるは強ち無用の辨でないのである。

使徒等は一所に集りて聖靈の天降りを待ちつゝ、あつた所が午前九時頃俄かに天より激しき風の如き響は來つて彼等が集つたる家に満ちた。其時舌の形を成せる炎の如きものが顯はれ分れて各自の上にと止まつた。此に於て彼等は聖靈に充たされ、又各自聖靈に満された。効果を見た、即ち聖靈は其心に入りて彼等は皆聖靈のいはしむる所に從て種々の言にて天主に感謝し始めた。其時エルザレムにあつた祭りのためと國々より大勢のユデア人が集つて居つた。彼等の中には我が生れし地の方言のみを知りてヘブレオ語に通じないものは澤山ある。然るに彼等が使徒の居れる傍を通り掛り物音を聽いて、其集れる樓に入つたが、使徒等が各方言にて天主に感謝するを聽いて皆驚き怪しみつゝ、互にいふ、視よ、彼等は凡てガリレア人ならずや、如何にして吾等が各生れし地の方言を彼等より聽くやと、而て猶追



々大勢集り來つて皆同じく、これは何故かと驚きつゝいふた、然し彼等の中に心の邪なるものもあつて、彼等は感ずるよりも却て嘲つていふ、此の人々は甘き酒に満され居るものなりと、此に於てペトロは立ちて他の使徒と共に樓の入口に立ちて群集に向ひて説教した、即ちペトロは先づ右の嘲りに對して其然らざる旨を厳しく辯じ是れ却つて豫言者ヨエルの云ひしことの行はれるのであると陳べ且いふ「イスラエルの人々よ此等の事を聴け、其れナザレツトの耶穌は汝等の知る如く神彼に依りて汝等の中に行し、妙なる能力と奇跡とと休徴とを以て汝等に證し給へる所の人なり、然れども此人は神の定めし且つ豫め知られし計らひに由りて汝等に渡さる、汝等は無法の手を以て之を捕へ十字架に釘て殺せり、神は其死の苦を釋きて彼を蘇らせ給へり、ダヴイド彼れに就いて曰けるは汝は吾が魂を陰府に

捨て置かず、又汝の聖者を朽果しめざるなりと、既に神は耶穌を蘇らせ給へり、吾等は皆其証人なり、此故に彼が既に神の右に擧げられ約束の聖靈を父より受けて、今汝等が見聞く如く之を注ぎ給へり、されば凡てイスラエルの全家よ汝等が十字架に釘けし此の耶穌を立て、神之を主となし基督となし給へることを確かに知れ云々」と、此説教を聴いたものは多く耶穌を知りて其徳其奇跡を覺え、中には耶穌が殺さるゝことに關係したのもあつた、けれども彼等は今日前に視る不思議のことに感動し、ペトロの説教に心が折れたる如く感じ、ペトロと他の使徒に向つて「人々兄弟よ我等は何をなすべきや」と問へるにペトロは答へて「汝等各悔改めよ罪の赦を得るために耶穌基督の名に依りて洗禮を受けよ、さらば汝等も聖靈の賜を受べし」といふた、これを聴いて直に洗禮を願つたものが凡三千人あつた、之が布



教の始め福音の公に知らされたる始め、耶蘇基督に定められ聖靈に完全にせられたる聖會の働きをなす始めである。

(二)何故に聖靈が火の形を以て使徒等の上に天降り給へるかといふに、これは畢竟使徒に與へ給ふ聖寵が如何なるものなるかを表はす爲に他ならぬ火の特性は照す、暖むる清むるの三つであれば聖靈は此の三つのことを使徒等の靈魂に於てなしたのである。聖靈は如何に使徒を照せしか御主は御苦難の前に使徒等にいふ「吾れ尙汝等に告ぐべき所談多けれど汝等は今之に堪えず、然れども真理の靈來る時は凡ての真理を汝等に教えむ」と實に其如く十二使徒は素より撲訥者にて教旨を悟るには無能であつたが、聖靈の降臨のために俄かに豫言も基督の教訓も宗教上の凡ての玄義も完全に悟り明瞭に辨へたのである。尙彼等は急に能辨に成り、凡ての真理を卑近に釋いて

如何なる學者をも説服し得たのである。聖グレゴリオいふ「聖靈が漁夫に滿ち而て傳教者と成し、罪人に滿ち而て萬國の博士と成し、收税吏に滿ち而て福音史と成し給ふ、嗚呼聖靈は巧なる者なる哉」と

聖靈は如何に使徒を暖めしか、聖靈降臨前の使徒の心は實に冷かなるものであつた彼等は儒く且つ怯るゝもので危き時は逃げ隠れべしト口は自惚を勇氣と思ひ違ひ婢の間には輒ち主を否み其耶蘇に對する冷淡は甚しいものである。而も聖靈降臨後は全く之に反して十字架に釘けられたる耶蘇を公然世に稱へ人民或は議會の前に其神たることを公言し耶蘇を殺したる罪を恐れなく彼等に負はせ間もなく又其國を去て萬國に往き其帝王の前に御名の御名を告げ神の御國を世界中に廣め悦びて迫害苦責を受け死に至るまで堪え忍びた、嗚呼是れ使徒の心は聖靈の焰のために燃えるはぎの愛熱を起し



たのである。聖靈は如何に使徒を清めたか、福音書の記す所を調ふるも十二使徒は欲点不足多く私慾に支配されて居つた傲慢の心を持つて世の名譽快樂を好み、怒り易く、仇を報ふに早く、信するに遅く、會得するに鈍きものであつた。而て聖靈が彼等の上より降り給ふや、俄かに謙遜、柔和、堪忍と成り、己が身に主の性格を現はすやふになつた。信は其心に深くも染潤み、教を萬國に弘むるを以て己が一生の望とするやふになつたのである。

要するに聖靈降臨の前は十二使徒が精神なく、生命なき肉体の如きもので、耶穌基督より命せられたる布教の大事業をなすには全く不可能なる人物であつたのが、聖靈降臨のために、肉体に精神、生命を注入せられて、萬民の博士、萬國の征服者、其完全なる模範者となりて、全

く此の大事業をなすに適當のものとなつたのである。

聖靈降臨を以て生せしめたる効果は、其一時に止まり、又十二使徒のみに限りたるにあらず、耶穌基督は彼等にいふ、吾れ父に請はむ、而て父は他の慰め主を汝等に與へ之をして、汝等と與に永遠に止まらしめ給はむと、其意は使徒等が聖靈を受けたるは、己れの爲にあらず、耶穌基督に立てられたる聖會が活きるためである。而て聖會は世の終りまで繼續すべきものなれば、其命其力とある聖靈も世の終りまで之を助くべく、與に在るべきものだといふのである。故に樓の中に起りたる聖會に、聖靈が天降りてよりは、常に之を離るゝことなく、十二使徒に生せしめたる効果は、今日までも絶えず聖會より生せしめつゝあるのである。

耶穌基督の教が少しも偽りに陥らず、二千年來傳はりて、其間だ屢起



りたる謬説、異端、離教等の迷ひを遁れ、總ての虚説の傳染を避け、偽りの畏を退くことが出来た、これ果して何のためであらふ、即ち聖會が絶えず聖靈の御光に照されたからである、其他又聖靈が使徒等の心に催したる焰は何時も聖會に於て燃えつゝある、聖會には代々使徒等の如く無数の艱難を凌ぎ、貧苦、耻辱、死までも犯して使徒の事業を繼いだものがある、耶蘇宜く「善牧者は其羊のために己が命を棄つ」と、此聖言の如く使徒に習ひ、聖主の模範に則り、其羊のために命を抛つは善牧者となつたものは數へられぬほど夥しくある、又世に建てられたるものは設けられたるものは如何なるものたるに係らず、長い間には何かの影響を受けて自然衰微し腐敗するが、聖會のみは何時も世の腐敗に感せず、其影響を受けずして反て絶えず聖人と稱せられる、精撰者を生せしめる、是れ將た何のためなるか、聖靈が

始終聖會を離れずして之を清め、總ての潰れを除き、聖ならしむるからである、されば本日は聖靈が降臨して聖會の基礎の一段を据え給ひたるもので、爾來天國に完全なる聖堂を建て終るに至るまで絶えずこれを建築しつゝあるものである、四聖靈は右の如く其効果を聖會一般に生せしむるのみならず、各信者の靈魂にも同じく之のあらしむるものである、善人の靈魂が清くして天主の聖旨に適ひ、其御寵愛を蒙むるのは、即ち聖靈が其中に住み給ふためである、而して聖靈は其人の心を照し、強め、清め、給ふて居る、其人に今迄の罪を深く痛悔せしめ、些細のことでも天主に背くまじとの決心を起さしめ、總ての掟を守り、天主に對して忠義を盡さしめ、塵世の何事をも天主の御攝理と曉し、快く之に遵はしめ、己を捨て、職



務に熱心に従事し、善業を行ひ、肉体を懲らしむる等を以て天主の聖意を嘉ばすことを望み、聖体を愛慕して屢之を拜領し、心の中に天堂の榮福を望ましめ給ふのである。一言を以ていへば善人をして聖主の正確なる形象たるに至るまで養成し給ふのである。然しながら聖霊は右の効果を凡ての信者の靈魂にも生せしめ給ふのではない。唯常に聖霊の恩恵を受くるためよ、良き覺悟をして一切の妨げを遠ざけることを慎むで守る者のみである。其覺悟とは心の安全と熱心の祈禱とである。私慾のために世間のものに愛着し、遊戯淫樂を好むで心の亂れたるものは聖霊の聲を聴くこと能はず。熱心なる祈をなさざるものは其恩恵を受けざることを得ざるものである。

(五) 本日は聖霊の恩恵を受け、其効果を我靈魂に生せしめ給はむことを需むるに於て最も好都合の日である。此の日に於て信者は聖霊の

我靈魂に來り給はむことを一向に願ふべきである。即ち「主を信するもの、心に來り滿ち給へど、又我心に聖霊の在すことを妨ぐるものを取去ることを頼むべきである。即ち「希くは汚れたるを清め、渴けるを濕し、傷けられたるを癒し給へ」と尙ほ又其後は聖霊の曉し給ふことに心を罩めて聽き、凡ての契めに遵ふの決心をせねばならぬ。されば聖霊は吾等をして「善徳の功を積み、助りの域に至り、永遠に喜ぶことを得せしめ給はむ」と疑ひないのである。

第十六章 聖霊降臨の八日間の事



(要略) (一)使徒等の宣教と奇跡の爲めに暫時にして教はエルザレムに大に弘まれり、(二)古の信者は絶えず説教を聴き、日々聖体を受け、何時も祈りをなし、其財産を困窮者に施せり、(三)ユデア人の多くは教を拒みたる爲に天主より甚しき罰を蒙るやうなりたり、(五)拜像教者の中より種々の迫害を受けつゝ、教が弘まり、終に萬民を服従せしむ、此の迫害の原因は悪魔と人の慾となり。

(一) 聖會祝日の中に於て耶蘇基督御復活の大祝日に次ぐ大なる祝日は聖靈降臨である故に一週間は引續いて之を祝ふ此一週間に信者の心懸くべきことは使徒等が如何に聖靈の恩恵に従ひ又聖靈降臨は古の聖會に如何なる効果を生ぜしめたかといふことである、聖靈降臨後使徒等は直にエルザレムに於て教を宣べることになり、

た其説教其奇蹟其生活は教を廣むるに就ては非常なる力があつた、故に聖會に加ふるものは日々大勢のものであつた或日ペトロとヨハネは聖殿に参詣したが、一人の寔者が門の傍に臥して居り彼等に施物を請ふた其時ペトロいふ、金銀は吾に無し、只吾に有る所のものを汝に與へむ、ナザレットの耶蘇の名に依りて立ちて歩め」と斯くいひつゝ、其手を取りて之を起せば、足と踝とは直に強くなりて躍て歩ひだ、これに驚いて大勢のものは聖殿の前に集まりたれば、ペトロは彼等に向て説教した、あれがペトロの二回目の説教である、而て其結果五千、千人洗禮を領げたといふ使徒等は斯の如く奇蹟を行ふたが、中にもペトロの身体よりは奇蹟が自然生ずるといふ有様であつたから、病人や魔に魅かれたものなどを連れてペトロの通路に之を置く、ペトロが其處を通つて其影が彼等病人にあたれば悉く癒されるといふ



やふであつた、然しながら聖主を殺すまでに悪みたる猶太人は其弟子等をも同じく悪み嫌つた故に間もなく弟子等は捕へられ擲たれ牢獄に投せられるといふ有様であつたが然し彼等は如何なる艱難をも凌いで少しも勇氣を挫かず裁判官の前にも獄中にも懼れず耻ぢず耶蘇の御名を稱へ、耶蘇のために苦しみ辱しめを受くることを幸として居つたのである。

(二) 古の信者の上に聖靈の御働きは如何様であつたらうか、彼等は全く新たなる人間と成り、世人といふよりは寧ろ天人の生活を爲すともいふべきものとなつた、聖書に依るに彼等は實に日々使徒の教ゆる所を聴き、或は聖書を讀むで信仰を堅固にするに努め、慎んで聖主の凡ての言を守り、彼等各自宅が殆んど教會の如くであつた、又毎日

ミサ聖祭を拜聴して聖体を拜領し、此秘蹟を毎日領けて以て掟を守り、且つ總ての艱難に堪ゆるの力を得、異教者を感動せしむるは互に兄弟の如く相愛するといふ恩恵を受けて居つた、其他又聖主の「絶えず祈れよ」といふ御言を念に懸けて、聖堂に集まりたる時、我家にあるとき、働くとき、歩むとき如何なるときも時處に關せず祈りを斷つことは少時もなかつた、又彼等は世上の財物より其心を脱して困窮者を助くるに盡し、心の自由を以て天主に事へ何時も耶蘇のため、に死するの覺悟をなす目的の爲に、其所有の財産をば擧げて使徒等に供し、使徒等と兄弟の如く共同生活をなすなど、實に古の信者に就いて聖靈の靈妙なる働きは感ずべき至りである、嗚呼古の信者の行爲は我等をして益熱信に進み、聖靈の恩に對して一層感謝を深からしむるの理由となるのである、如何となれば我等も古の信者の兄弟



である彼等をして新たにし聖ならしめ給ひたる聖靈は同じく我等をしても斯る効果を生せしめ給はむ思慮あるからである。されば吾等は従順の心を以て聖靈の訓戒を聞き奉つるべきではあるまいか。

(三) エルザレムの古の信者が右の如く熱信なるに引換えてユデア人の多くは改心しなかつた彼等は耶蘇基督を認めずして之を殺した罪として其使者の宣教に服せず却て彼等を迫害するの罪を重ね爲に未だ例なきほどの恐しき罰を蒙むつたのである。

先づ耶蘇御昇天後間もなくユデア國には飢饉疫病騒亂等は頻々として至り、其極羅馬に對して反亂を起し、羅馬の大軍に攻め入り、國內至る所其蹂躪する所となり、ユデア人は悉くエルザレム府に推し詰められた。此時ユデア人の饑饉内亂敵軍の殺す所となつたものは揚げて數へられないほどである。而て終にエレザレムも其

奪ふ所となり、府も聖殿も兵燹に罹り滅亡して仕舞た。此戰亂に死せざりし多くのユデア人は磔刑に處せられ、残りたるものは悉く國外に放逐せられたのである。彼等は爾來今日に至るまで國家もなく聖殿もなく、世界中に離散して萬民に嫌はれ憎まれつゝ、吾等の爲に教の眞正なること、聖書の眞實なること、特に耶蘇基督の豫言の成就せられたることの生きた證據となつて居るのである。

(四) ユデア人等は使徒の教を受けないゆゑに、使徒は此國を去り萬國に分れて拜像教者に福音を宣べ始めた。聖靈は絶えず彼等に助力し又使徒等自らにも數多の奇蹟があつたから萬國の民に感動を與へ、其一代中に教が萬國に廣まつた。其結果萬國の人が眞の道を知ると共に其風俗は一變するほどに革まつた。

然しながら教は世の反抗も迫害も受けずして弘まつたのではない。使



徒の時代より長年間聖會は屢々恐しき迫害を受け如何なる國に於ても反抗されつゝ、弘まつたのである。其反對者はユデア人、其他拜像者、異教者、數多の學者殊に敵國羅馬である。ペトロとポトロが多數信者と共に殺されたる時より三百年間といふものは、間斷なく大抵の國に於て迫害せら信者は種々の苛責の中に殺さるゝといふ有様であつた。惡魔は斯く聖會に對して世の凡ての權力者の反對を起さしめたが、聖會は聖靈に助けられて益勢力を得終に羅馬の大帝コンスタンチノが服従して自由を與へた其後は聖會に對して斯くまで恐しき反對はないが、然し何處にも反對者は多くある。今又國に依ては随分使徒の時の如く酷しい迫害を受けることもある。是等迫害の起る原因は惡魔が耶穌基督に逆らふことゝ、基督教に服従するを忌む者の傲慢心、及心の腐敗せるものゝ反對より來るのである。然れど

も耶穌基督の約束に因て地獄の門は到底聖會に勝つ能はざるものである。聖靈降臨の八日間に於て夏の四季の小齋があるが之は第三季第二十章四季の小齋を釋く所にあれば此には省く。

(第三季) 聖靈降臨後の節

第十七章 三位一体の祝日の事

(要略) (一) 三位一体は毎日殊に主日に祝し居れるが、聖會は特に此を義を祝するため、聖靈降臨後の第一主日を其祝日と定む。 (二) 三位一体の主義は天主の聖父と聖子と聖靈の三のハル



ツナを具へ給ふことなり(三)三位一体の玄義を信じ其御稜威を拜禮し屢十字架の印を畫すのである。

(一) 聖會は三位一体を特別に祝するため一日を定だめたが實は毎日此玄義を祝し別けても毎主日に於て之を祝する毎日如何に之を祝するか三位なる天主のみを拜禮し感謝を献げ居るのである勿論聖母マリア天使諸聖人を敬ふことも實は是彼等を聖ならしめ彼等に天堂の榮を與へ給ふた三位なる天主を賛め奉るものであるされども三位一体を特別に祝するは一週日中主日である主日は開闢の第一日にして全能の父なる天主が虚無より天地万物を創造し給ふた日だからである又主日は耶蘇基督が復活し給ひたる日で天主の聖子が人間の救靈を成就し給ふた日である又主日は聖靈降臨のありたる日で聖靈は聖會を聖ならしめ給ふた日だからである然し聖會

は三位一体を特別に祝するため一年の祝祭の週期の終りに其凡ての祝を省略して一回にし其日を聖靈降臨後の第一主日と定めたるのである。

(二) 三位一体の玄義とは聖父と聖子と聖靈の全く別なる三つのペルソナを具へ給ふ天主の一体なる義である言換れば天主は其性其体性一なれども天主の性天主の能働を全く具ふる所の三つのペルソナが在らせらるゝ而て聖父は天主の第一位にして始めなく聖子を生み聖子と共に聖靈を發出せしむる御者である聖子は天主の第二位にして始めなく聖父より生れ聖父と共に聖靈を發出せしむる御者聖靈は天主の第三位にして聖父と聖子とより發出し給ふ御者だといふのである。

此三位一体の玄義は限り無き天主の本性にして其本体中の妙能で



ある故に人間の淺薄なる智慧を以ては之を悟り得られざるものである、然れども其第二位なる天主の聖子は人性を被給ふて此世に降りたるるとき三位一体のことを屢教え給ひしに因りて之を確く信するるのである、只天堂に於て親しく天主の尊前に貌を合す時のみ之を悟り得るであらふ、此主義に就て吾々の注意すべき要件は左の二つである、

第一三のペルソナは混合すべからざることを、

聖父は聖子にもあらず、聖靈にもあらず、聖子は聖子にもあらず、聖靈にもあらず、聖靈は聖子にもあらず、聖父にもあらず、聖父と聖子と聖靈は何れも始めも終りもなきもの、何れも全能全智全善なるもの、何れも真正の天主である、然れども決して一つのペルソナでなく、全く別々なる三つのペルソナに在らせられる、此の三つのペルソナの

別々なることは耶蘇基督の金言中に明かに示されてある、今其一を擧ぐれば「吾父に請はひ而て父は他の慰藉者を汝等に與へ之をして汝等と共に永遠に止まらしめ給はむとす」と此金言にいふ所の吾とは天主の御子たる耶蘇自らを示し、父とは第一のペルソナを示し、他の慰藉者とは聖靈を示すものである、

第二天主の体を區別せざることを、

聖父と聖子と聖靈は全能であり、全智であるも、三つの全能者、三つの全智者であるのでない、聖父と聖子と聖靈は何れも主であり、神であるも、三つの主、三つの神でない、共に唯一の全能者、全智者、唯一の主、唯一の神である、耶蘇基督は三つのペルソナ一体のことも明かに教え給ふていふ、「吾と父とは一なり」と又耶蘇基督に定められたる洗禮の言に「父と子と聖靈の名に依るとある、これ即ち父の名、子の名、聖靈の



名に依るといふ意でなく、父と子と聖霊の三の名に依るといふの意である。

(三)三位一体の玄義は天主に於て最も靈妙且つ最も聖きおとを示す玄義である。三つのペルソナは天に於て無上の御稜威の中に在し給ひ、天使は其威嚴に打たれて慄へながら之を拜禮し奉り、地に於ては總て吾等の受くる恩恵を三つのペルソナの御名に依りて授けらる。洗禮は其御名に依りて吾等を天主の子とせられ、悔悛は其御名に依りて我等の罪を宥す、尚又三つのペルソナは善人の心に棲み給ふ、されば智恵を以ては此玄義に服従して確く信じ、情を以ては之を深く拜禮感謝すべきである、其他又耶穌基督の訓戒に従つて天主の聖なるが如く我生活も聖にし、耶穌が御死去の前になし給へる末の祈りに因りて三つのペルソナが一致し給ふ如く信者は信仰と心とに因

て一致すべきである、尚又屢々殊に業の始め終りの時、誘惑の起るときなどには慎むで十字架の印を書し或は榮誦を唱ふべきである、本日は右のおとを今日まで如何様に務めたるかを能く糺し後日に務めの足らざることをなからしめむの決心をなすべきである。

### 第十八章 聖体の大祝日の事

(要略) (一) 聖体の大祝日は聖体を特別に敬拜する爲に定められたる日なり、(二) 本日は聖体の秘跡に付て信すべきことを心懸くべし、(三) 本日は聖体を崇ぶ爲に各處に行はるゝ慣例なる行列に参加すべし、(四) 本日を聖とする爲に、悔悛聖体の秘跡を領け



名に依るといふ意でなく、父と子と聖霊の三の名に依るといふの意である。

(三)三位一体の玄義は天主に於て最も靈妙且つ最も聖きおとを示す玄義である。三つのペルソナは天に於て無上の御稜威の中に在し給ひ、天使は其威嚴に打たれて慄へながら之を拜禮し奉り、地に於ては總て吾等の受くる恩恵を三つのペルソナの御名に依りて授けらる。洗禮は其御名に依りて吾等を天主の子とせられ、悔悛は其御名に依りて我等の罪を宥す、尚又三つのペルソナは善人の心に棲み給ふ、されば智恵を以ては此玄義に服従して確く信じ、情を以ては之を深く拜禮感謝すべきである。其他又耶穌基督の訓戒に従つて天主の聖なるが如く我生活も聖にし、耶穌が御死去の前になし給へる末の祈に因りて三つのペルソナが一致し給ふ如く信者は信仰と心とに因

て一致すべきである。尚又屢々殊に業の始め終りの時、誘惑の起るときなどには慎むで十字架の印を書し、或は榮誦を唱ふべきである。本日は右のおとを今日まで如何様に務めたるかを能く糺し、後日に務めの足らざることをなからしめむの決心をなすべきである。

### 第十八章 聖体の大祝日の事

(要略)一、聖体の大祝日は聖体を特別に敬拜する爲に定められたる日なり。二、本日は聖体の秘跡に付て信すべきことを心懸くべし。三、本日聖体を崇ぶ爲に各處に行はるゝ慣例なる行列に参加すべし。四、本日を聖とする爲に、悔悛聖体の秘跡を領け



ミサ聖祭を拜聴し聖体降福式に與り聖体を見舞ふことは良きことなり、

追加

(一)聖体降福式は奉置せられある聖体を拜禮し其掩祝を受くることなり、(二)聖体の見舞は聖堂に晝夜在す耶穌基督に拜禮感謝を呈するため之を見舞ひ奉ることなり、

(一)聖体の大祝日は祭壇の至聖なる秘跡を特別に崇ぶために定められたる大なる祝日である耶穌基督は御死去の前日聖体の秘跡を定められたれば本来は其日に聖体の秘跡の設立を記念するのである、此頃は聖會が御主の御苦難のことに心を傾け盡してあるから聖体の秘跡のことは充分に之を思念するの餘裕がない爲に別に秘跡を祝するの日を特定したのである、それは三位一体の祝日に次ぐ木

曜日であるが教皇の特別の許しに因つて日本の教會のために此祝祭式をば次の主日に延ばされた、

聖會が斯く聖体の秘跡を貴ぶため大なる祝日を定めたる理由は數多あるが、先づ第一は聖体の秘跡にて耶穌基督が全く在ますことを確信するものなるを公然表章するためである、其他又耶穌基督が聖体の秘跡を以て人と與に住み給ひ、カルワリヨの犠牲を日々新たに献げられて其御死去の功徳を與へ給ひ、親しく人の靈魂の糧とならせ給ふことなどの鴻恩を感謝し、深く之を拜禮するため定められたのである、其他又之を定められた目的は聖体に對して罪人のなせる侮辱を償ふためである、聖体の秘跡を侮辱するものは之を信すること拒む異教者、異端者及罪のため汚れたる心のまゝにて聖体を領ぐる悪き信者聖体を領ぐるを懈り或は微温なる心を以て此の至



聖なる秘跡を領くる冷淡なる信者などである。

(二) 聖体の大祝日を聖とする第二方法は此の至聖なる秘跡に就て信すべきことを能く思念して之に付き深き信徳を現はすことである。依て茲に聖体の秘跡に就て信すべき要点を畧陳せん。

聖体の秘跡は耶穌基督の御肉と御血と共に其御靈魂も天主の性も眞實含ひものである。されば耶穌基督は今天堂に於て在すが如く全く聖体の秘跡に於て在すといふこと。

ミサ聖祭に於ける祝聖の言を以て變性の大奇跡が行はれる即祭醗の本質が耶穌基督の御体に變化し葡萄酒の本質が其聖血に變化し聖祭中の祝聖式後は祭醗と葡萄酒に存する所は只其形色のみであるといふこと。

御主は祭醗の形色の中にも葡萄酒の形色の中にも悉く在ます尙之

を如何に分割するも其部分にも悉く在ますといふこと。

耶穌基督が聖体として在ますのは形色が腐敗し或は變性する時までもなりといふこと。

耶穌基督が同時に天にも在し地にも在し無數の祭壇の上無數の聖祭醗の中に在すといふことなごである。

嗚呼此の聖体の秘跡中にかくも奇跡のあることは如何にして充分に感じ充分に恩謝することが得られやふか。

(三) 聖体の大祝日を聖とする他の道は此日に於て所に依り行はるゝ行列に参加することである。此行列は聖体を貴ぶために華美壯麗を盡す。

先づ行列の次第は司祭が聖体の納めらるゝ懸置臺を捧げて天蓋の下に進む其時聖体の前後に燭火を持ち香爐を持つものが随ふ而て



行々花を散ずる祭主及び他の聖務者は總て美麗なる祭服を被て賛美歌を謳ひながら旗花常盤木等を以て飾られたる途を總行列が進むのである所々に休息祭壇の備へありて此處に至れば聖体を奉置し香を献げ皆膝を屈して天地の主の掩祝を受くるため首を下げる、耶蘇基督はガリレアの邑々を経廻り給ふたときに其御通過ありたる道々にて人を助け人の体も靈魂をも癒しつゝ行かれたものである本日壯麗なる行列のまゝ町村田畑の道に進むのも矢張其如く人々の一身一家より農作物に至るまで恩恵を下し給ふたのである、されば右の行列に参加するものは耶蘇基督に對して信仰と敬愛を盡し病者が救世主御通路の傍にありて其助けを求めたるが如き信仰を以て其御助けを一向に請ひ求め又耶蘇を賛めたるもの、如き熱信を以て其光榮を譽め其御恩を感謝すべきである、

四聖体の大祝日を聖とする他の最も好き方法は悔悛の秘跡を以て我心を淨め熱心に聖体を領するものである、其他又本日と其一週間に行はるゝ所のミサ聖祭を拜聴し毎日行はるゝ聖体降福式に與り、或は聖体に於て在ます御主を見舞ひ奉ることである、然し右等の務めを果すべきはとは聖体の祝日の頃に限るといふ譯ではない、何時にても之を果すのは善に進むの好き道である、故に此務のあとには本書第一部に於て既に解説してある只聖体降福式と聖体見舞のこと、は未だ説明しなかつたから茲に本章の追加として其大略を陳べむ、

追加

(一) 聖体降福式 聖体降福式は聖体を祭壇の上に奉置し祈禱と讚美歌を以て聖体拜禮感謝をなし終りに行祭は聖体を捧げて參拜せる信者を祝福する式である、此式を執行することは聖体大祝日の他に



も展あるが別に一定の規則はるい只司教の許可に因りて行はるゝのである。

此式の行はるゝ所以を信者が耶蘇基督に對しての信仰を増し公に御主に對する拜禮感謝の義務を盡し耶蘇基督に對する罪人の凌辱を償はしむるなどである故に此式に與るものは御座に在し給ふ御主に忝しく拜禮感謝を呈し罪人の改心を祈り聖体を領るの望みを起すべきである。

二) 聖体見舞 耶蘇基督は聖堂内に於て聖櫃の中に晝夜在す是れ即ち天に昇り給ふて後も尙此世に無量の愛を以て人々を助け人々と與に世の終りまで住み給ふたのである是れ親が子の許にありて之を守り王が臣民の中において彼等を撫育し醫師が患者の許にありて彼を癒し朋友が其朋友の下にありて彼を慰め富者が貧者の許に

ありて彼を恵みなどするに比すべくもあらぬ神が其被造者の許にありて彼等と共に住む事を樂しむとし給ふ事實に何に例へやふか嗚呼吾人は斯くも憐み慈みに満ち溢れ絶えず人々を己の下に招き給ふことを考へれば何うして其愛に感動せずして居られやふぞ其御招きに悦びて従はざるものがあらふぞ己れの孱弱ことを知るものが之を強め給ふ耶蘇あらゆる恵みの泉なる基督凡ての病を癒し總ての不足を補ひ愛ふる時の慰籍厥く時の依托迷ふ時の光心の冷なる時の温めなる御主の許に何うして馳せ寄らずに居られやうぞ苟も耶蘇基督の無量の愛憐を悟るならば我心は磁石に鐵の引かるゝ如く御主の住み給ふ聖櫃の下に頼しく望まねばならぬされば聖堂の近所に住むものは好會を見都合を量つて度々聖堂に參詣し聖体を見舞ひ奉る事を樂みとすべきである而て慎みて御主に拜禮感



謝を献げ敬愛の心を以て己又他人のために祈り且聖体を領くるの望を起し最愛の主の掩祝を求むべきである。

### 第十九章 耶蘇基督聖心の大祝日の事

(要略)一、蘇耶の御心を拜する主意は一致合体に因りて天主のペルソナの位に引上げられたる耶蘇基督の御心は人に對する御主の愛の徽號なるがゆえに之を拜禮するなり、二、耶蘇の御心に對して斯く敬虔なる所以は愛を増し罪を償ふためなり、此目的を達せむには耶蘇の御心を研究して之を拜禮し愛

と償の務めをなさざるべからず、三、此御心の大祝日は耶蘇御自身が福女マルガリタ、マリアに求め給ひたるに因りて定められたるものにして「我心に對して敬虔なるものには多くの恵みを與へむ」との事を福女に約し給へり。

一、聖体の大祝日より八日目の金曜日は耶蘇聖心の大祝日である、此大祝日の設立せられたることを解明す前に耶蘇の聖心を拜禮するの主意其正當なること其目的のことなどを陳べる必要がある、耶蘇は天主と人間の両性が一位たる迄合体し、猶人性即御靈魂御肉体御血が神の聖子の貴きペルソナの位にまで引揚げられた、此故に耶蘇基督の御靈魂御肉体御血も其御肉体の各部分其御血の一滴までも拜禮せらるべき價あるものである、其結果として耶蘇の御肉体中の最も肝要なる一機關たる心臟が拜禮せらるべきものなのである、然



し、聖体の秘跡中に全く存する耶蘇の御肉体を拜禮しつゝあるに何故特に聖心を拜禮するかといふよ、其理由は心臓が人体中に於て總ての慾殊に愛情の起る機關である、されば耶蘇の胸中に於て高尚の感情の動機たる聖心は特に人に對する無量の愛に動くのである、故に耶蘇の聖心は世に降り、苦死をなし聖体を定めるなど凡て人を助け、けるための事業をなすやふ勤めたる無量の愛の徽号である、故に耶蘇の聖心を貴ぶのは取も直さず其萬善萬徳分けても言語に盡せざる御愛憐を貴ぶことである。

(二) 耶蘇の聖心を拜禮するのは當になすべきことたるのみならず、聖心に對して敬虔なるべきことには二つの最も貴き目的がある、其第一は即耶蘇は至聖なる心を以て吾人に最愛なる無數の褒賞を與へ給ひし故に吾人も亦た耶蘇に對して己の心を熱愛に燃ゆしむると、

第二は耶蘇基督に對し、殊に至聖なる聖体の秘跡に對して罪人の侮辱を償ふこと、此の二つの目的を達し得らるゝならば、如何に御主の聖心に適ひ之を悦ばせ、且つ己のため大なる利益あるか分らるゝ、而して此目的を達せしむる主なる方法は如何といふに左の四つである、

第一は耶蘇の聖心中に含まれたる寶を研究することである、即其聖心の優れたると、其愛憐の深きこと、其他一切の御徳を知れば知るは吾胸中に耶蘇に對する敬虔心が厚くなる筈である、

第二は耶蘇の聖心を拜禮することである、耶蘇基督の御肉体の各部分が拜禮せらるべき價值あれば、況して其最も高尚なる機關、其無量の愛憐の徽号なる聖心は猶更拜禮すべきものである、

第三は耶蘇の聖心を愛することである、人に對する愛に燃ゆる耶蘇の聖心はを愛すべきものは無い、一切の善徳を含み、神の性に充る聖



蘇の聖心の美はしきは例へるものがない形容する言を知らぬ既に  
 生るゝも病者罪人を厚遇するも人間の爲に一言の口を開かずして  
 死するも聖体を以て吾等の聖糧となるも天に於て吾等のために住  
 所を具へ給ふも皆其御恩其御慈愛である其鴻大なる無量無比であ  
 る斯くも耶蘇の聖心の愛すべきものなること其美はしきこと其温  
 和なることを考ふるは吾心中に耶蘇に對する愛を起すに如何に有  
 効なるぞ而し耶蘇に對する愛は眞正の愛なれば只心中に感情の動  
 くのみ止まらず尙言にも行にも現はすべきものである耶蘇宣は  
 く「吾が心にて柔和謙遜なるを吾に學べ」と而て耶蘇の聖心の外に現  
 はし給へる愛や謙遜や柔和などの善徳を鑑みとして己の耶蘇を全  
 く愛することを現はすべきである  
 第四は耶蘇に對する罪人の侮辱を償ふことである耶蘇基督の聖心

は最も愛すべきものなるに多くの人は其愛に對して無頓着である  
 否耶蘇を特別に愛すべき身分であり位置にあるものまでも多くは  
 屢侮辱を以て背くのである斯る無数の罪を償ふことは耶蘇に對す  
 る義である又耶蘇を全く愛し他人をも全く愛するの證據である  
 (三)聖會は耶蘇の聖心に對する信者の敬虔の念を起し且之を尊敬す  
 るやふ勤める爲に此聖心の大祝日を定めたのである此大祝日は天  
 来の命令に因りて定められた十七世紀の頃佛國に一人の至て熱信  
 なる童貞女福者マルガリタマリアといふものがあつたが耶蘇は屢  
 此福女に現はれ給ふて人に對する熱愛に燃ゆる聖心を現はし給ひ  
 又其愛に對して人々の無頓着と忘恩とを歎き給ふた而て福女は人  
 々の無頓着と罪人の凌辱とを償ふために祝日を定めむことを親し  
 く求めた其時の耶蘇の御言は左の如くであつた「吾汝に請ふ吾躰の



大祝日の八日目に當る金曜日を以て吾心を尊敬する祝日に特定すべし。此日に於て聖体を領けよ、而て祭壇の秘跡に於ける聖体を奉敬者の尊敬するため特に公けに報せられ居る此時節には吾心に對する人々の侮辱瀆されたる吾榮譽を回復せしむるといふことを以て償ふべし。斯く吾心を尊敬する凡てのものは神聖なる我心の恩恵に因りて天の恵みに満さるべきことを約束するなり」と此命令に因つて耶穌の聖心の祝祭が始まり先づ福女の居る修道院に行はれ後教皇の命によりて聖會一般に行はるゝやふになつたのである。是のみならず耶穌は屢福女に現はれ給ひて、吾心を敬ふべきものと愛すべきものと屢聖体を領け又聖堂に見舞ふことなどを以て罪人の侮辱を償ふべきことを帯り給ふた。且又右様の務を以て聖心に對し敬虔なるものには次の十二ヶ條の約束をし給ふたのである。即ち

- 一、其地位に應じて一切必要の恩恵を興へむ。
- 二、其家庭に平和を有たしめむ。
- 三、總ての難みに於て慰藉を得む。
- 四、命の間殊に臨終の時安全なる避難所たらしむ。
- 五、總ての企てに充分なる祝恩を下さむ。
- 六、罪人の憐みの源泉と盡さざる海洋とを我心の中に得む。
- 七、微温なる靈魂が熱信と成らむ。
- 八、熱信なる靈魂は迅速に完全の地位に進まむ。
- 九、神聖なる吾心の形象を備へ且つ敬ふの家を祝せむ。
- 十、救靈の事業に従事するものは其融薄の心を融和するの感應を興へむ。
- 十一、此敬虔なる務を弘布するものゝ名は吾心に刻されて永く消え



三、凡て月の初の金曜日（金曜日）に續いて九回聖体を拜領するものには臨終の痛悔の恵みを吾心より與へむ。

人々が右御約束の効果を我身に受けむとならば本日耶蘇の聖心が特に御受難と聖体の秘跡を以て現はし給ひたる所の深き御愛憐を考へ罪人の侮辱と多くの信者の無頓着なるを償ふために熱信に聖体を領け耶蘇の聖心（聖心）のみに遵ふために吾心を献げ熱信に教を守り且潔き心を以て屢聖体を領けて耶蘇の聖心を歡ばしむるの決心をなすべきである。

### 第二十章 四季の事

(要略) 一 四季共に始めの水金土の三曜日（三曜日）に苦行を定めらる。二 其理由は罪を償ひ、心を強め、好き天候を需め、良き司祭を天主より願ふためなり。

(一) 聖會は春夏秋冬の各季節の始めに三日間の悔悛の苦行を定めたる。其三日は即ちその週間の水金土三曜日である。此時に守るべき悔悛の行は大齋である。雖然聖會は日本新信者に對して特別の憐みを以て四旬節の大齋の大部を許したる如く各季節の三日の大齋をば小齋に變へた故に日本に於ては此三日共に小齋を守れば足り、其日は四季の何れの頃に當るかといふに、春季にありては四旬節の第一と第二主日との間に於ける水金土の三曜日、夏季にありては聖靈降



臨大祝日の後の水金土三曜日秋季にありては九月十五日と廿一日との間の水金土三曜日冬季にありては待降節の第三と第四主日との間の水金土三曜日である右の日を稱して四季の小齋日といふのである。

(二)四季の始めに三日間の苦行を定められたのは古い事で幾んど聖會の始めからである夏秋冬の三季に大齋するの例は既に舊約時代に行はれた聖會が大齋又は他の苦行を定めたる理由は四旬節の解説の章に陳べたれば再び此にいふの要はない然しながら各季節の始めに於て三日の苦行を定めたるは何のためかといふに第一は前季節に於て犯したる罪を償ふて其赦を受けんがため第二は各季節中心を強めて罪を犯さず次の季節を迎ふるの恵みを求めんがため第三は季節に因りて天候が變じて天災の憂少からざるゆゑ地の百

穀のために好き天候の恵みを求めんがためである亦四季の土曜日には品級の秘跡を授けることに定められたる日である而て聖會一般の信者のために適當なる聖職者を得るほど肝要なことはない故に此時に於て新司祭の上に天主の恵みを求むるため信者が苦行と祈禱をなすべきで之も一の四季の苦行の理由である。

第三節 聖會の準備と苦行の理由



### 第三部 聖母瑪利亞に關する祝日

#### 第一章 聖マリアの瀆れなき御孕の大祝日の事

(十二月八日)

(要略) 一) 十二月の八日に聖會はマリアの瀆れなく孕りたることを祝ふ。アダムの罪が人類一般に傳はりしが、獨りマリアのみ之を免る。是は豫定せられたる耶穌基督御死去の功德のため、特に其孕りに於て原罪の瀆れを受けざりしなり。

(二)

マリアが斯程の特恩を受けたるは、基督の母として撰定せられたるためなり。

(三) 此特恩の結果たる道徳上に原罪の影響を受ず、其善徳も功も非常に、其愼みも至て深きなごなり。

(四) 吾人は此祝日によりて洗禮の爲に受けたる恩寵の貴きこと心の清淨なるの大切なるを、マリアに倣ひ頼むべきことなどを教訓せらる。

一) 聖母マリアの祝日を解釋するには、聖會曆に記されたる順序に依らずして、聖母の傳に依りて順序を定めたるれば、聖母の祝日の解釋を讀むで自然聖母の傳を知るの便益がある。此故に先第一に説く所は十二月八日に祝すべく定められたる聖母の瀆れなき御孕の大祝日である。

聖マリアが瀆れなく孕り給ふたといふことは、マリアが元祖の罪の



傳來を有たずして此世に來たられたといふことである。元祖の罪は元祖自身の聖寵と福樂とを失ふた結果のみに止まらない、アダムは人類一般の頭であるから其影響は支體なる子孫に及ばねばならぬ故に元祖が墮落すると共に吾人子孫までも墮落せしめられた。されば凡そ人間としては誰人も元祖が天主より受けたる呪を免るゝものは決して無い實にポーロがいふたる如く一切の人間はアダムに於て罪を犯したものである故に人は皆生れながら怒の子である。聖寵も天主の子たる特恩も天堂の相續者たる特權も悉く失ふたものである。然れども吾等は信仰によりて知り得る萬民を靜めたる大洪水に於てノエの宮舟が助けられたる如く人間の生命の源を潰す濁流の障害を受けないものが一人あるといふおとを、おれ即ち至聖なる母たるため天主より特に撰れたるマリアである。此故にゴブリ

エル大天使は之を聖寵充滿てるものと稱へ聖會は麗はしく純なしと賛美し奉るのである。

されば如何なる人にてても其母の胎内に於て靈魂が肉体と合せらるゝがゆるに生命の始より罪の汚を受けけるが聖マリアのみは其母の胎内に靈魂と肉体と合して人となる時に既に全く美しく全く麗しく天使より貴く萬善萬恩に充ち天主に全く喜みせられ主の頼もしき住所となつて居つたのである。マリアが斯く汚れなき懷孕の特恩を受けたる譯は其御子たるべき救世主の豫定せられある御死去の功徳に因るのである。凡ての人々のためには洗禮の秘跡を受くる時に靈魂に附着せる罪は消され其瑕疵の瘡さるゝために耶穌基督の御功徳が醫藥となるのであるが、マリアのためには耶穌基督の御功徳は罪の全く無きとさに於て既に其豫防藥として施されたので



ある、嗚呼、マリアの救はれたる方法は他の聖人の救はれたる方法より如何に優れたるものではあるまいか、斯く始めより罪も汚れも全く無いから其神聖なる御子の如く「現世の君即惡魔は吾に何をも有することなし」といふことを得たのである。

(二)何故にマリアは獨り萬民中に汚なく孕るの特別なる大恩を受けたるかといふに天の撰定によりて主なる御子の母と爲り世に住み給ふ神の聖堂聖櫃たるべきものだからである、天主の御子が人間を助けんがためには人間の肉体を着し給はねばならぬ、然し人間の肉体を着し給はんが爲に何れより之を受くべきか是非とも其母たるもの、血肉より受けねばならぬ、即ち母たるマリアの肉を其肉の材料としマリアの血を其脈に流さねばならぬ、天主と斯くまで密接な

る關係を結ぶべきものが暫時にても罪の爲に汚れ惡魔の支配を受けたとは思はれないことではあるまいか、

天主の御父は其御獨子の母となるべきものを恩恵に充たせ給ひ天主の御子は我母となるべきものを完全にし給ひ聖靈は基督に至聖の人性を生せしむるために己れの靈妙なる働きをなすの器となるべきものを最と清からしめ給ふたことは疑ふことが出来ないほど明かではあるまいか、さればマリアは人として受け得らるゝ丈の恩恵を悉く之を受け人の性質に能ふ限り完全のものに作られたのである、罪を犯す前に人祖に無つた汚れがマリアにあるとは決していへないことではあるまいか、

(三)マリアが無源罪に孕り給ふたことの結果は如何といふに其結果たる實に感すべきものである、人を助けるに於てマリアは其御子の



總ての苦みに與かるべきものたるがゆゑに大なる艱難辛苦を忍び給ふたが源罪が道德上に及ぼす總ての悪結果は悉く之を免れ給ふた、其心は少しも悪に傾かず、天使よりも清く邪慾の發動を少しも感せず、生涯毫末も罪を犯さず、其心は何時も天主の御影を完全に反映してあられた、此故に聖會はマリアを賛めて天の光の榮なり天津日より美しく、光に比べて其輝きは勝るなりと稱へまつるのである、

マリアは斯く總ての聖人に遙かに優るも尙善徳の道に居りて歩を緩めず絶えず天主より受くるの聖寵を増し之を利用することに努めて居られたのである、マリアが善徳の道を出立せらるゝときに於て既に其聖なることは想像に過ぐるほどであるから其如何に高く進みたるか其愛徳其謙遜其從順其謹慎其忍耐等を以て如何に天

主の聖慮を悦ばせ、如何に大なる功を立てたるかは到底も吾人の會得し能はざる所である、聖言に曰く「實を積みし處女は多ければ汝は凡ての處女に優れり」と、

其他又吾人の最も感じ且つ鑑むべきことは、マリアは邪情の發動を感せず、聖靈の光に照され、天主の助力に強められ、罪を犯し得られざるものなるに、尙且幼時より終生世の悪風に感染することを避くるに努め、又絶えず祈をなし、世の交りを選けて益天主の聖意に適ふものたらむことを努めて居られた、これ實に弱きものなる吾等のために最も良き戒めではないか、願くは忠信なる童貞、最も謹深き童貞、吾等をして汝に肖らしめ給へ、

(四) 此大祝日に於て吾等はマリアの無源罪に懷孕の特恩を受けたるために之を祝し、且御獨子の母を此深き恩恵を與へ給ひたる天主に



感謝しなければならぬ、  
 此のマリアの無源罪の懷孕といふおとより吾等は有益なる教訓  
 を多く受ける今其大略を陳れば先づ吾等はマリアに反して罪の中  
 に孕り天主の仇悪魔の奴隷に生れたのである然るを其貴き血を以  
 て救ひ怒の子なる吾等をして天主の子とならしめ給ふ耶蘇基督の  
 大恩は之を何に例へべきか吾等が生れたるはマリアに反して朽ん  
 が爲めである然るをペトロのいはれし如く洗禮に因りて朽ちざる  
 ものに新たに生れたのである洗禮を以て得たる恩寵はアダムが墮  
 落の爲に失ひたる恵みにも勝るされど己の難みを憂ふることを知  
 らず暗と死の蔭に居る異教者の中より撰まれて此大恩を受けたる  
 吾等には何の功も何の働きもあつたものでない只天主の吾等に對  
 する特別の愛憐のみに因りてある故に吾等は絶えず天主に感謝

しなければならぬ、  
 又マリアが無源罪の懷孕より教訓せらるゝことは心の清淨はど重  
 すべきものはないといふことである人の爲には罪と汚れの無いこ  
 とより良いことはない若しあれば必ずや天主は其御獨子の母たる  
 ものに與へ給ふべき筈であるマリアも亦た天主より賜はりたる恵  
 みの中には罪の無いことが最も勝れたるものだと知つて居られた  
 ロルドの出現のとき其御名を問はれて「吾は汚れなく懷孕したるも  
 のなりと」答へ給ふたされば心の清淨なることは萬徳に勝ると思は  
 ねばならぬ従つて天主の聖旨に適ひ聖体を領けて吾心を天主の聖  
 子の休み所となすには罪を避けてマリアの如く清き心を有たねば  
 ならぬ、  
 然しアダムの子孫にして汚れの中に孕り邪慾に傾きたる心を有つ



吾人は如何にせば洗禮の秘蹟を以て得たる聖寵回復したる清淨を  
 失はざるやふ保つおとが得られやふか、先づ吾等を助けむが爲に救  
 世主の母たるおとを承知し給ひ、吾等をば己れの子の如く愛し給ふ  
 汚れなきマリアに懇願むべきである、マリアは天主の聖寵の母とい  
 はるる御者ゆゑ其御子たる基督に頼み給ふことは總て必ず賜はる  
 であらふ、故に此祝日に於て吾等の肉体も靈魂も其保護の下に預け、  
 悪魔の誘惑と邪慾の汚れとを遠ける願ひをなさずして一日をも送  
 らないやふに決心すべきである。



## 第二章 聖マリア御誕生祝日の事

(九月八日)

**要略** (一) 九月八日に祝するマリアの御誕生は救世主の來る  
 近きにあるおとを告ぐるものなり、マリアの親の門地は高く  
 又其親は既に老ひたるおとに罪なく生る、其兩親ヨアキム(被  
 昇天后の主日)とアンナ(七月廿六日)はマリア、イネズ、に近き  
 關係あるものゆゑ最も敬ふべきものなり、(一) マリアの御名  
 は清く榮あり、且悪魔を防ぎ天主の聖寵を蒙むるに與つて大  
 なる力あり、(三) マリアは三歳の時エルザレムの聖堂に其親  
 より献げられ十五歳に至るまで萬徳の模範を示しつゝ、其處  
 に居らる、(四) 本日はマリアを祝するは勿論マリアの如く天



主の聖寵を利用し、且其御名を屢呼びて之に頼むの決心をなすべきなり。

(一)九月八日はマリアの御誕生を祝ふために定められた、聖會は信者が歡びを以て祝ふやふに勤める、本日歡ぶべき譯は、數千年の前より萬民が救世主の御降誕を待ちつゝ居り、又其御降誕は童貞女よりあるべきことを豫言されてあるから、此童貞女の誕生せられたる本日は救世主御降誕の日に近づいたおとを告ぐるものである、又マリアが曉の星と稱へらるゝは、曉の明星を見るときは太陽の出ることが既に近づきたるを知らるゝ如く、マリアの誕生は正義の太陽が出で、世の暗を照すおとの遠からざるを悟り得るからである、嗚呼數千年間といふ長夜の後の日の出を告ぐる曉の星なるマリアの誕生は如何に歡ばしきものではあるまいか、尙又マリアの誕生に就て着眼

すべき点は其他多くある、第一マリアの生れたる家は貧苦の中に世を渡るべき基督の母に相當なる質素の家であるが、其父なるヨアキムは猶太國王の系統で、ダヴィドソロンなどの後裔である、又其母なるアンナは司祭族であつて、アロンの子孫である、而て又マリアの生れたのは天性に因るといふよりは寧ろ奇蹟に因るといはねばならぬ、何となればヨアキムとアンナは年既に老ひたが未だ子がなかつたもゝ絶えず天主に祈り大齋や施業をして子の生れむおとを祈求した然るに天主は彼等の願ひを嘉納し給ふて、イスマエルの助りに大なる役目を有する子の生るべきことを知らせ給ふた斯る奇跡に因りて生れたるマリアであるから、其誕生の時に兩親の歡びと天主に對する感謝とは如何はゞであつたらふ、  
其他マリアの誕生したときに既に他の人々と非常に違つて居る源



罪の汚れなき特恩を受けた爲に聖籠に充たされて居る又天主の御  
 獨子の母たるため撰定せられたゆゑ天使より清くして天主の最愛  
 の子女聖靈の喜みし給ふ聖き休憩所であつた故にマリアは其時よ  
 り聖なりしことは人の目には當らなかつたが天使の感服に堪えざ  
 る所であつた  
 思ふて此に至ればマリアの親耶蘇基督の祖父母と成つたヨアキム  
 とアンナは聖人中に於ても其位の特に高いことが解る又天主より  
 マリアの親耶蘇の祖親たる特恩を受けたからは之に適ふの聖籠を  
 も受け尙又其徳其善行其功は斯くまで高き位に相當のものであつ  
 た故にマリアに無源罪の恩恵を授くるため天主の用ひ給ひたるヨ  
 アキムとアンナの貴きことマリアの清淨なる肉体を造るために其  
 血肉を分けたる親の清きことは大に優れたものであつたされば

マリアを敬ふと共に其親をも敬はなければならぬヨアキムの祝日は  
 聖母被昇天後の第二主日に定められアンナの祝日は七月二十六日  
 と定めらる。

(二) ヨアキムとアンナは其子にマリアと命名した此マリアといふ御  
 名は耶蘇の母たることを示すものなれば其ほゞに貴きものである  
 此御名は其實なるマリア其方の如く清く榮えあり力あるものであ  
 る故に敬虔の心を持ちてマリアの御名を呼ぶことはマリアの御心  
 を悦ばせ且其保護を受け其傳達を以て天主の助けを受くるに最も  
 有功なることである尙又惡魔はマリアの御名を聴くことに已が首  
 を踏掻き地上に於ける已が力を弱くしめたるものを思ひ出すゆゑ  
 其度に通げ去るのである尙マリアは天主の聖籠の母にして天主が  
 人に與へ給ふ凡ての恵みはマリアの手に傳はるのであるからマリア



アの御名を呼ぶときは靈魂に付ても肉身に付ても何の恵みをも受け得られる。就中邪慾に克ち肉慾の發動を抑へ、体も心も清く保たむにはマリアの聖名を眞心を以て呼ぶは與つて大なる力あることである。如何なる時如何なる場合にもマリアの聖名を呼ぶものは幸福である。されば數々其御名を呼びて憐むべき罪人なる我等のために何時も殊に臨終の時祈り給はむことを願ふものは、我救靈を天主の御母なる力あるマリアに預けて安全にしたものである。

(三) マリアの幼年の時の事蹟に就ては聖書に何をも記してない。然し古傳に依ればマリアの親は其子の身上に就て爲したる誓願を遂げしめむがため、其三歳の時にエルザレムの聖殿に伴ひて之を主に獻げた。其時既にマリアは智慧が開け天主に生涯事へるため己の身を供し奉り、イスラエル民中に未曾有なる終生童貞の願を立てたので

ある。耶穌基督の犠牲を除くの外、前後とも聖マリアの奉獻は、天主の聖意に適つた献物は無い。斯くてマリアは三歳より己が家に歸るとき即凡十五歳に至るまでの幼年時期をば聖殿の中に過せした。其間のマリアの生活は如何に天主の聖意に適つたか、耶穌の母と成るために天主に養成せられて、聖寵を如何に多く蒙つたか、善徳の道に何れほど早く進んだかは、逆も測り知られぬことである。聖アンブロヂオがマリアを描寫せる語にいふ常に言語少くして、只天主の光榮と利益あるおとのみに語り、俗塵を避け世外に暮すことを好み、祈禱を絶つおとなく、謙遜柔和柔順にして人に對しては愛と親切とを盡し、何時も五官を制し、日々勤勉に、完全なる謹慎を以て天主の聖旨に適ひ、又天主を益深く愛すること、にのみ意を留めたりしと、嗚呼感ずべき做ふべき完全なる模範ではないか。



(四)昔或熱信なる修道者が毎年九月八日に當りて天使は大なる歡びを以て天に於て樂を奏しつゝ歌へることを聴いた而て或天使に其所以を問ふたれば彼は今日天堂にマリアの誕生を祝する日であると答へたといふ此話を聴いたならば吾等も此日天使と同心に歡びマリアを祝し彼を聖寵に充たしめ給ひたる天主に感謝を盡さなければならぬ尙又マリアは天主より受けたる特別の恵みを利用する爲に如何に慎みたるかを深く考へて我等も同じく多數の人の中より撰まれ特恩を受けて天主の子たる位置に上げられたことを覺え絶えず天主に感謝し我懈怠と務めを果すに於て心の緩漫なることを改めてマリアの如く受けたる恩惠の成功を期するの決心をなすべきである其上又自己の孱弱ことを考へて聖母の保護を受くるため屢其御名を呼び取分け日々天使祝詞を度々唱へるの決心をなす

べきである。

第三章 聖マリアの御告の大祝日の事

(三月廿五日)

要聖 (一) 聖會は三月廿五日聖母の御告即ガブリエル大天使の告げを承諾ひ其胎内の天主の子を懷孕し奉りたるため聖子が人と成らせ給ひたるを祝ふ (二) マリアは天主なる耶穌基督の眞正の母たるに依り天主の母といふべきものなり故にマリアは天主と最も近き關係を有し耶穌の協救世者にし



て人の救霊の本となりたるものなり。(三) マリアの基督を懐  
 孕し之を生みたるは童貞に於てありたることにて少しも其  
 徳を失はず其後に於ても其徳を失ひたることなきゆゑ母た  
 ると共に童貞たるものなり。(四) 本日人々は天主の聖子の謙  
 遜を考へて感謝をなし且天主の聖母を祝すると同時に之に  
 懇願すべきなり。

(一) 聖會は三月廿五日に聖マリアの御告を祝ふが時として御復活祭  
 の前後に當ることがある其時は此日に祝式を擧げぬとがある若  
 し斯の日は御受難の主日に當れば其翌日に延ばし御復活前後の十  
 五日間に當れば御復活後の第一主日の翌日まで延ばされる。  
 此の御告の大祝日は耶穌基督御托身の玄義が行はれたることを紀  
 念するの日である御托身の玄義とは天主の聖子が人性を着し給ひ

たることで天主が其全能と全愛とを最も顯はし給ふ所の一大玄妙  
 なる事蹟である。  
 今其事柄を聖書に従つて陳れば天主は人を救はむが爲に其御獨子  
 を遣はし給はむと豫て定められたる幸福の日に至れるとき此大事  
 を人に告げるために在天者の中より一位の擧んでたるガブリエル  
 大天使を遣し給ふた彼はナザレットといふガリレヤ州の一邑に住  
 むマリアといふ童貞女の家に来りマリアに現はれて天より命せら  
 れたる左の祝詞を以て挨拶せられた曰く慶哉聖寵充滿てるものよ  
 主汝と共に在す汝は女の中に祝せらるゝものなりと世に殊に天の  
 使に斯ほど崇められるものは無いから謙遜なるマリアは其言に驚  
 いて斯る祝詞を受くるは何の理由なるかを考へて黙念して居た天  
 使は之を見て又いふ「恐るゝ勿れマリアよ汝は神の前に恩寵を得た



るなり視よ汝胎内に孕して男子を生まむ汝其名をイエズスと名くべし彼は大きなものとならむ又最と貴きもの、子と稱へられむ主なる神彼に其先祖ダビドの位を與へ給はむ而て彼はヤコブの家に永遠に王たるべし其國には終りなかるべし」とマリアは天主の全能を知り且救世主が童貞女より生るべきことをイザイアの豫言に依りて知り居れば天使の言を疑はずされども自分は天主に身を献げて終生童貞の願を立てたれば天使の言に對して承諾ふ前謹み深き童貞女は此事我立てたる願ど如何に抵觸せずして遂げ得べきやを思ひ答へていふ「吾は男を知らざるものなれば此事如何にして成らむや」と其時天使は童貞女の心を安全にさせるため人性を着し給ふべき天主の聖子の妙理の幽玄所まで示していふ「聖靈汝に望まむ、最と高きもの、力汝を覆はむ此故に汝より生れむとする貴きもの

は又神の子と稱へらるべし」と而てマリアの信仰を固め之を安心せしめ且悦ばしむるために尙いふ「見よ汝の親族なるエリザベツトも亦た老ひたれども男子を孕めり彼の石女と呼ばれたるもの今は既に六月に成れり是れ何事も神に能はざることなければなり」と實に天主は年老ひたるものに子を生み得させ給ふなれば童貞女より其童貞の封を開くことなく子を生み得させ給ふことあるべきことである、

天使は斯く語り終りて其任務を果し黙してマリアの答を待ちつゝ居るマリアは天より照されて天使の言の意味を能く解し得たが彼は答る前に精神を置いて謙遜し主を拜禮して居られた嗚呼此時の暫時こそ實に貴い時であつた天も地も黙して人類一般の救靈の係る所の童貞女が言を待ちつゝあるの時である彼マリアは身動きも



せず、目を下げ、手を拱みて得も云はれぬ信仰と謙遜と純朴とを以て  
 「吾は主の婢なり聖言の如く吾になれかし」と答へられた天使は之を  
 聴きて直ちにマリアの許を去り天に復命した嗚呼此言の福なるこ  
 と其功の無量なるおど如何程であらふ、マリアは斯く答へたればと  
 ろ其胎内に天主を呼降し、天主の聖子は人性を着して童貞女は其母  
 となり、言は肉となりて吾儕の中に住み給ふやふになつたのである、  
 吾儕は茲に天主に拜禮し感謝すべきである、吾儕は茲に吾儕の助り  
 の本となり給へるマリアに謝し、其清淨謙遜熱愛を以て天主の聖子  
 を孕し給へることを感謝すべきである。

(二) マリアは耶蘇基督を孕し給へるに因りて天主の母となつた、此天  
 主の母たる位、こゝマリアの受けたる萬恩の源である、而てマリアが  
 此の天主の母たることは毫も疑ひを容るべからざることである、何

となればマリアが基督を孕し、之を生みたる方法に於ては、人間一般  
 の法則と異なるも、眞實に之を孕し、眞實に其血肉を分つて基督の肉體  
 を造り、之を生みたるものであれば、耶蘇基督の眞實の母たるに相違  
 ないからである、而て耶蘇基督はマリアの胎内に孕し給ふときに既に  
 神人の兩性を聖子なる一のペルソナに合体せしめたるものであ  
 れば、マリアより生れたる御者は即天主といふべきものである、故に  
 其眞實の母たるマリアは矢張天主の母といふべきものである、  
 マリアが天主の母たる位の高きことは、天主が其全能を以てするも  
 之より高き位を人間に與へることは出来ないほどである、之を以て  
 マリアは天主の聖父と共に耶蘇を其御獨子と呼ぶことを得られる、  
 又マリアは聖父より萬物の主權者と定められ、萬事に超えて天の最  
 上に在す天主の聖子に對し權利を有ち頼むといふでなく命けるこ



とが出来来る。又マリアは耶蘇の御母として救世主に親子の關係があるから基督の爲し給へる凡百のことに與つたものである。殊に耶蘇基督が人を救ふたことに就て聖母も其協力者たるは凡百の哀みと苦みとを共にせられた基督の母たることを承諾たる時に於て其御子基督の身上に天主の量り給ふべき一切の事に同意せられ其割禮も奉獻も埃及への遁逃も其御一生殊に御受難にも恐しき心の苦痛を忍びて以て救靈のために我最愛の御子を千辛萬苦の手に渡すことを甘じ給ふたされば吾等が助りを得たるは素より耶蘇基督の御功德のみに因ることは言ふを待さるも救世主の母たることを承諾ひ其御子を萬苦に渡したるマリアも其原因となつたことに疑ひない、マリアは斯く耶蘇の母となりて吾人に救靈を得させたのは即吾人の母と

なり給ふたものである。

(三) マリアに就て尙感すべきことは其終生童貞なりしことである。童貞とは何ぞといふに之を形体から云へば肉体の玷なきことである。之を徳からいへば肉体が無玷のまゝに何時までも貞徳を守るの決心である。而てマリアの最も感すべきは人の母となりたる聖女も數多あり童貞であつた聖女も澤山あるが母たる名譽と童貞徳とを合せ有つたものはマリアの他決して無い。マリアの國に於ては其時すでに終生童貞を守るの例はなかつた。然るにマリアは聖靈に照されて清き心を以て天主のみに事へるために終生童貞の願を立てたのである。マリアの目には童貞徳が萬事に優り天主の母たる位にも勝るものであつた。大天使ガブリエルが基督の母となるべきことを告げた時此妙能が己の身の清れなく行はるべきことを解明されて始め



て承引せられた位である、  
 而てマリアは天主の聖蔭に覆はれて言語文字に現はすことの出來  
 ない聖靈の妙能によりて懷孕せられたのである、此妙能は無形であ  
 る、神聖である、マリアの童貞徳を潰さるのみならず、寧ろ之を堅固  
 にしたといはれる、耶穌基督が御出生なされても其御母の童貞の封  
 は毫も傷り給はなかつた、耶穌基督といふ童貞女より咲出でたる美  
 しき花が幹より離るゝに傷けず、太陽の光線が水晶を透して之に傷  
 けず、其光澤を潰さるゝが如く、耶穌が聖母より生れ給ふに其肉体を  
 傷はず、何の苦痛もなく其清き其眞正の光澤を其儘に通じ給ふたの  
 である、又耶穌が御復活せらるゝとき墓の口なる大石を動かさず、封印  
 を破すして出で給ひたる如く、其母の童貞の封を破らずして生れ出  
 で給ふたのである。

後世マリアが童貞願を破つたなぞ稱へるものがあるが、彼等は信仰  
 に反するのみならず、不淨の言を吐いて自ら己の口を汚すものであ  
 る、如何にして此最も優れたる位と徳ある清き母が天主の聖子の孕  
 りを以て祝聖せられた其体をば總ての潔からざる觸接より避くる  
 ことを守らなかつたなぞ、思ふことが出來やうぞ、マリアは實に聖  
 書に録されたる所の閉ぢられたる花園、封せられたる泉である、此花  
 園は萬徳の花に咲満ちたるものにて、耶穌基督のみ其園中に入りて  
 其果實を味ひ、此泉は其水極めて清冽に私慾の風に動されず、邪情の  
 泥に汚れざるものにして、耶穌基督のみ之に渴きを癒し、且其眞澄に  
 映する其姿を悦ばしく眺め給ふものである、  
 (四) 本日を聖とするには、先第一天主の聖子の謙遜し給ひたることを  
 深く觀念すべきである、耶穌基督が吾等人間の地位まで謙り給ふ



たは吾等をば御自分の位置まで引上げむがためである、其人性を受け給へるは吾等を神性に與らしめむがためである、人と交り給へるは人と神と交らしめむがためである、小なるものと成らせ給へるは人を大ならしめむがためである、聖オグヌチアの言に「神が人と成り給へるは人をして神と成らしめむがためなり」と嗚呼天主の斯はどの愛憐斯ほどの謙遜の妙義は如何にして悟り得られやふぞ第二に深く信望愛の心を起して耶蘇の無量の愛其不思議の謙りを感謝すべきである、今日まで其愛を認めざりし己と他人の罪を詫び將來は信者の位に適當なる生活をなし又屢清く熱き心を以て耶蘇基督を受け尙他人にも耶蘇基督を悟り且愛せしむることに熱誠に働くやふ決心すべきである、

其他本日に於て天主の母となれる特恩を受けたるためにマリアを

祝すべきである、又基督の母たることを承引かせられたるために吾等に救世主を與へ聖子と協救世者と成り給へることを深く謝し、尙又吾等の助りの原因吾等の御母吾等の代願者と成り給へることに對して深く信頼し且聖母の如く深く耶蘇を愛し之に熱信に事へることを得せしめられむことを願ふべきである、

第四章 聖母御訪問の祝日の事

(七月二日)

(要略) 七月二日はマリアがエリザベットを訪問し、ヨハネが



其生れざる前に聖靈に充たされたることを祝ふ、マリアはエ  
リザベツトに譽められ主を賛美する詞を以て答へらる、(二)御  
訪問の時マリアは凡て天主の賜はる恵みの道なること、且萬  
徳の模範なることを示さる。

(一)ガブリエル大天使がマリアに救世主の母たらむことを告げたる  
とき其身に行けしへき妙事に就て至清なる童貞女の信仰を堅固に  
せむがために、彼より退く前告げていふ、「汝の親屬エリザベツトは年  
老ひたれど男子を胎めり、此石女と呼ばれたるものも今は六月にな  
れり、是何事も神に能はざることなければなり」と、マリアは天使の此  
言を以て已に其意を諭し給ふものと知り、直ちにいで、急ぎて彼の  
親族の家を訪ふた、之を聖母の御訪問といふのである、マリアがエリ  
ザベツトを訪問せるは御告を受けてより僅かの後即四月の始めで

あつた、然しながら此四月の頃は聖會が常に救世主の御受難或は御  
復活を記念するの時に當るもゑるれで聖母の御訪問を祝するのを  
七月二日と定めたのである、エリザベツトは司祭ザカリアの妻で夫  
婦とも至て正しく主の掟を能く守つた、けれども彼等には若き時よ  
り子が無つたのである、所が天主の特恩により年老ひてエリザベツ  
トは懷孕した、其生れたのが救世主の先驅者たるヨハネである、之よ  
り先マリアはガブリエルの御告を受けられたれば彼は謹慎にて交際社  
會に出る事は好まなかつたが聖靈の示しに従ふて早速家を出で山  
道を辿りてユデア州中でも遠く離れたるエリザベツトの在所へ赴  
き、ザカリアの家に至つた、ソコでエリザベツトに遭ひ先づ安否を訪  
ふて國の習慣に従ひ「主汝と共に在れ」といふた、此胎内の基督の見舞  
聖母の御言葉の功果は如何に不思議なりしぞ、此御言葉のエリザベ



ツトの耳に入るや、エリザベツトの孕兒は其胎内に躍り母なるエリ  
 ザベツトは聖靈に充たされた此の躍りたるはヨハネが我救主と感  
 じ其來り給へるを悦び、父ザカリヤがガブリエルより告げられたる  
 如く母の胎内に於て聖靈に充たされ原罪より淨められ聖寵に充た  
 されて聖せられたからである。此子を聖とせられたる聖靈の恩恵は  
 母にまで溢れ彼の心に充ちマリヤに行はれたる不思議のことを知  
 り、救主の母なることを悟り之を尊びてガブリエルの祝詞に次いだ  
 る母と子の賛辭を奉つた、曰く「汝は女の中にて祝せらる、又汝の御胎  
 の御兒も祝せらるゝものなり」と而て救主の御母の前に謙遜の心を  
 以て尚いふ、吾主の母の吾に臨める此福は何處よりぞ、見よ汝が安否  
 を問ふの聲我耳に響くや吾胎内の子歡びて躍れり、嗚呼信せし汝は  
 幸なる哉、主の汝に告げ給ひし其事は必ず成就すべければなり」と斯

る祝辭を聴くもの誰れか心に満足せざらむ、然るに謙遜深き童貞女  
 は天主より賜はりたる特恩を己が善良なる所以とせず悉く天主の  
 聖旨にのみ歸するのである、即マリヤは聖靈の彈する調子良き弦樂  
 の如く天主に對する感謝に勇みて右の親族の祝辭に對して左の如  
 く天主を賛美して答へとした、曰く「吾靈は主を貴び、我魂は我救主の  
 神を樂む、嗚呼婢の卑しきをも神顧み給へり、今より萬代の人は我を  
 幸なるものと稱へむ、大能なるもの我に大なる爲をなし給へり、其御  
 名は聖なる哉、主を恐るゝものには其憐み千代萬代に及ばむ、自ら其  
 手を以て力を現はし、其心に傲るものを打ち給ふ力あるものを其位  
 より下し、賤しきものを高め給ふ飢わたるものには飽かしむるに良  
 きものを以てし、富みたるものは空手にて去らしめ給ふ御憐みを覺  
 えて其僕イステラエルを助け給ひ、吾等の先祖に宣べたる如く、アブラ



ハムにも其子孫にも代々に限りなし」と斯る高尚なる言を以て己の如く卑しき婢に於て天主の爲し給ひたる大なる行爲のために其全能愛憐聖なることを稱へ且救主の母に對して萬代に絶えず奉るべき賛美を豫言せられた嗚呼吾人は更に卑しきものなれば天主より大恩を受けたるをばマリアの如く屢「我魂は主を崇む」といふ言を以て賛美すべきである。

マリアがエリザベットの家に止まりたるは凡ろ三月の間で、エリザベットがヨハネを生みたる前後マリアは其親族に對して親切なる世話を盡されたのである。

(二)聖母が其親族の家を訪問したることに依りて吾等は數多の教訓を得る、第一はマリアが天主より人に賜はる總ての恵みの道だといふことである、耶蘇基督はマリアの胎内に孕り給ひたる日より既に

人を救ふの働きを爲し始め給ふた、而てうれは皆マリアを以て爲し給ふたのである、即耶蘇はマリアを以てザカリヤの家に臨み、マリアの温かなる挨拶の言を以てヨハネを照し清め、己の先驅者たらしめ、エリザベットをして聖靈に満たしめ、托身の玄義とマリアの榮を悟らしめ、ザカリヤをして己の事と其子ヨハネの天命を先知せしめ給ふた、此等の總ての不思議のことは全くマリアの訪問、マリアの言によりて得られたものである、而てマリアは基督の生涯の間又天に於て今日に至るまで基督が本とする所の全能の代願者萬恩の道たる任務を御子を以てザカリヤの家に助りを與へる時より始めたのである。

尙此御訪問に依りて教訓せられたことは、マリアの模範によりて萬徳を教わらるゝことである、即マリアは聖靈の示しを悟るや直ちに



其勤めに従ひ、忠實の心を以て之を守つた彼のエリザベットの住める邑に行くときも途中を急ぎ給ふたのは、すべて純潔清淨を守らむとするものは世間のものに目を留めず、心を擾さるやふに用心すべきことを教ねるのである。又エリザベットの家に至りて救主の母なる自分より先づ安否を問ひ、大なる賛美を受けては、己に満足せず却て己の卑しきことを深く悟りて、天主のみを賛美して謙遜を現はし、自分がエリザベットよりも優れたるものなるに係らず、其親族に對して忠實親切なること婢の如くして愛の模範を示した。

嗚呼吾人信者たるものは、絶えず萬徳の龜鑑たるマリアに目を着けて、之を鏡となすやふ力を盡すべきではあるまいか。マリアは耶蘇を携へて之をヨハネ、エリザベット、ザカリアに與へたのである。吾等も耶蘇を携へて之を他人に與へるやふせねばならぬ。心には聖寵を以

て耶蘇を携へ、行と言とを制して以て耶蘇を携へねばならぬ。凡ての人々の前に耶蘇の香しき匂ひとなり、清らかなる生活、信仰深き談話、善行を以て耶蘇を他人に知らしめ、且愛せしむるやふ努めねばならぬ。嗚呼吾人はマリアに依頼まねばならぬ。彼が耶蘇に殉じたる如く、吾等も信實にマリアに殉ずることを得せしめ給はむことを。

第五章 聖母の清淨の祝日の事

(二月二日)

(要略) 二月二日にはマリアが耶蘇御誕生後四十日に聖殿



に赴きて童貞なるも清淨の式に與り且御子を天主に献げたることを祝ふ其時シメオンが救世主を認めて天主に祝謝したることもあり、(二) 耶蘇は勇氣と深き愛とを以て人の爲に死するやふ己が身を奉獻し給ひ、マリアは謙遜を以て天主の掟を守り、總ての苦難に堪忍ふために其御獨子を天主に献げ、シメオンは我命を天主に献ぐ、(三) 本日ミサ聖祭前祝別せられたる蠟燭を以てイエズ、マリアの聖殿に來り給ひたることを表するに行列を以てす、吾人はイエズ、マリア、シメオンのことを鑑とすべきなり。

追加信者たる婦人が出産後の祝別式に與るは良習慣なり。

(一) 聖會が二月二日に祝するおとには二つの意味がある第一は天主聖母たる、潔き童貞マリアは其御子耶蘇基督御誕生後四十日目に

エルザレムの聖殿に參られ清淨式に與り給ふたおと、第二は聖母の御子基督を聖殿に於て奉獻せられて御自分を聖父に献げ給ふたおとである、耶蘇と其母とが斯ることをせられたるは古來の掟を守るためである、此掟の録されたる第一はレビ記十二章にして「女若し種を孕して男子を生まば……四十日漬るべし而て清まりの日充つれば當才の羔と若き鳩或は二羽の鳩を携へて祭司に到るべし、祭司は之を神の前に献げて其御名のために贖を爲すべし、而かせば其漬れ清まるべし」と、第二は出埃及記十三章に録されてある「主埃及國の凡ての初子たるものを人の初子より獸の初子まで悉く殺し給へり此故に凡て其母の胎を開きて始めて生れたる男子を悉く分ちて天主に歸せしむべし、男は凡て主のものなればなり」と、此二つの掟は如何なる人も守るべきものなるはと意味が廣いなれども其録された



る言の上より見れば斯く示し給ひたる聖靈は耶蘇と其母だけは此規則を守るべき範圍内に置かぬ聖慮であつたと思はれる何せなれば聖靈の奇特によりて清らかに耶蘇を孕し童貞の特徵に傷かずして其御子を生みたる聖母と又斯く生れ給ふた御子には此掟を守るべき原因が實行せられなかつたからである斯く已れのために定られたものでない掟はイエズスもマリアも之を守り給はざるも可いのである。

然るに耶蘇は罪人の形を以て世に降り給ひたるゆゑ凡ての罪人の守るべき掟を守るの聖慮であつたのである而て聖母の清淨式と耶蘇の御奉獻の事柄を撮要で陳ればマリアとヨゼフはイエズスを携へてエルザレムの聖殿に赴いたが素より貧しきもので有から二羽の鳩を購ふて聖殿の門前に立止まつた而てマリアは御子の誕生を

以て常の女の如く漬れたるものとして司祭に清淨式を行ふて貰ふた次にイエズスを司祭の手に渡して其贖の爲に立法に定められたる代金を献げた司祭はマリアの手より子を受けて之を頭上に舉げ天主に献げて後其母の手に歸した。

當時エルザレムにシメオンといふ老人があつて彼は至て熱信なるもので救世主の來るべき時期の早められむことを誓願を以て祈つて居た然るに天主は彼の願を御聽許あり必ず汝の死する前主なる基督を視ることを得んどのことを聖靈に依りて告げられた斯く折しも右に陳る如くマリアがイエズスを聖殿に伴ひ参らせたのである。うれでシメオンは聖靈に充たされて聖殿に來た而て今此に奉獻さるゝものが己の常に熱望しつゝある所の救主なるを知り且之を伴へる女は清らかに之を生みたる母なることを知つてイエズスを



御母の手より受けて我胸に抱占め、天を仰ぎ悦びに堪わす。天主に祝謝して、「主よ、今こゝ御言の如く此僕を安らかに逝かせ給ひ、蓋は吾親しく主の救ひを見ればなり。此は主が萬國民の面前に立て給へる救主なり、異邦人を照し明むる光なり。御民イスラエルの榮なればなり」と、老人が斯く其心の満足なることを言ひ現はしたるを聴いて驚き居るマリア、ヨゼフを祝し、幼兒の母に目を着けて左の如く豫言した、「嗚呼、此子はイスラエルにて多くのもの、亡びむため又多くのもの、起らむために立てらる、且つ言ひ逆らひを來すべき證となるべし。將に劔ありて汝の靈を刺し通さむとす。斯くて多くの人の心の思考は洗はるべし」と。

此に又、マリアの娘にしてアゼル族のアンナといふ豫言者なる女あり、彼は七年間其夫と共に居りしが寡婦となりて後再婚せず。今

は既に八十四歳に至れり、彼は此時恰も二晝夜の參籠と祈禱をなして聖殿を離れず居つた。故に彼も此に來りて救主を認め、主を賛め、凡てイスラエルの救を待つものに、此子のことを語つた。

マリア、ヨゼフは斯く立法に定められたる總ての事を終りて家に歸つた。而して耶蘇は幼年の間ナザレットの里なる親の下に住みて、彼等に孝を盡し、世に現はるべき時期の至るを待ちつゝ居給ふたのである。

(二) 此の耶蘇御奉獻に於て、イエズス、マリア、シメオンの精神は如何先イエズスはマリアの手を以て天主に獻げられたるも、實は自ら己を御父に獻げ給ふたのである。既に此時に於て十字架上に遂ぐべき犠牲を供し始めたのである。總て受くべきあらゆる苦痛をば彼が己爲に己を犠牲に供したのである。マリアの手より司祭に渡されたる時



は御父の御稜威に對して謙り殆んど無きもの、如く成つて、天主を深く拜禮し、萬民の罪の贖をなすべき性として我身を全く天主の御手に任せ給ふたのである、イエズ、が斯く我身を献げ給ふたことは如何程の愛と勇氣とが含みをもるかといふに、其聖父の命令に従つて人を助けるために我心に與ふべき總ての苦痛、我体に堪うべき總ての苛責を豫て悉く辨へ居られるのである、故にイエズ、は是等のことを悉く眼前に視ながら聖父の御稜威に對しての萬民の侮辱を贖ひ萬民の罪を償ふためには是等總ての耻辱苛責を甘じて堪へむと快く承知し給ふたのである、嗚呼イエズ、の勇氣、其聖父に對する敬虔人に對する愛やなかくに語り得らるゝものではない、

次に此時のマリヤの御心は如何、マリヤのために最も價のあつたことは、耶穌基督の母となりて前後共に童貞に玷のなかつたことであ

る、然るにマリヤは故らに清淨の規則に従つて此特恩を人前に潜めた、他の女の如く子を生みて不淨に成りたるを示し、聖殿の門前に立ちて罪人の如き態を表はし給ふた、嗚呼マリヤの斯ることを見ては其心の謙遜と掟を守るに熱心なること驚くべきではあるまいか、而て耶穌が已を献けたるに於て非常なる勇氣ありたるものなるが、マリヤが已の子を献げ給ひたることも亦た吾人の想像し得られぬほどの勇氣があられたものである、往古山上に已が獨子を襁に献げたる彼のアブラハムの信仰を感せざるものはないであらふ、されば今其御獨子なる耶穌を天主に献げたるマリヤの信仰勇氣熱愛を感せざらむと思ふも得べからざることである、マリヤの耶穌に對する愛の深きことは世の凡ての母たる人が子に對する愛に勝ること萬々である、而て之を聖殿に献げたる時彼は既に人間の助りのために



犠牲に供せられべき天主の羔なることを知り尚シメオンの豫言を以て其子のために己が靈の苦みの剣に刺さるべきことを聴くも凡て御子の身の上に天の聖父の量り給うべきことに對しては悉く承引ひ給ふた斯くマリアの心を勧め動かすものは即人に對する其深き愛がせしむるのであるマリアは斯くの如く耶蘇の凡ての御苦難を共にするを以て協救世者となり吾等のために代願者たるの權利を得たのである

終りにシメオンの心は如何彼ハマリアの手より神聖なる嬰兒を受け之を胸に抱占めたるとき其歡喜其熱愛如何斗りであつたらふ其精神が天の光に照され其心が熱愛に燃されたのである故に天主に祝謝し且救主を見たる歡びに堪えずして我生命を天主に献げた即 彼は眼を以て救主を認めれば其終生の願望が遂げられ最早

世に他に望むべきものはないから逝りて天に行むと望むたのである

三、聖母の清淨の祝日の特別なる所は、ミサ聖祭執行前に爲す所の蠟燭祝別式と行列とである、即 祭壇右方の臺の上に多數の蠟燭を供へ置き、司祭は盛大なる式を以て之を祝別し、各信者に配當し、其より司祭と信者は行列を成して聖堂の内外に進み行きつゝ、耶蘇とマリアがエルザレムの聖殿に赴き給ふたことを歌を以て賛美するのである

該行列はイエズ、とマリアが當日聖殿に參詣し且己が身を天主に奉獻し給ひたることを表するのである、故に該行列に與るものはイエズ、とマリアに伴ひ彼等を賛め彼等と同意たらしめ、己が身を天主に奉獻するの心を有つべきである、又各自が手に持つ蠟燭はシメ



オンより「異邦人を照し明めるの光」と呼ばれたる耶蘇基督を表する  
 のである。即ち耶蘇は迷と罪を照し防ぐ爲に世に來り給ひたるもの  
 ならば、教旨使徒の派遣、示し給ふ萬徳の鑑、聖寵などを以て暗にある  
 人の心を照し給ふものだからである。又其蠟燭は洗禮及他の秘跡を  
 以て祝聖せられたる信者を表するのである。何となれば彼等は燃り、  
 且輝く燭火の如く、心は天主に對する愛熱に燃り外には善良の手本  
 を示し輝すべきものだからである。聖ポーロが古の信者等に勸めて  
 いふ「汝等は缺點なく滑る所なく、神の真正の子となりて、悪く且邪な  
 る世間に於て燭火の如く世に光るべきものなり」と、  
 本日聖堂に於て司祭に祝別せられたる蠟燭は、准秘跡である。之を各  
 自が我家に持ち歸り例へば雷電、暴風雨、或は臨終のものある時に点  
 火すのは、我身体家屋の上に天福を招くものである。

本祝日を聖とせむに信者の心懸くべきことは、第一イエズスの如く  
 吾等の神吾等の主なる天主にマリアの手を以て我身を献げ生涯天  
 主のみに事へるの約束をなすこと、第二マリアの如く深き謙遜を以  
 て熱心に凡ての掟を守るべきこと、且我子我親我兄弟我身等凡て天  
 主の攝理に任せ禍福ともに良き心を以て天主の手より受くべきこ  
 と、第三シメオンの如く特に聖体を受くる時に深くイエズスを愛し、  
 天堂の福樂のみを思ふの恵みを願ふべきこと、此三つである。  
 (追加)古來マリアが爲られたることを模範として信者なる婦人は、  
 産後始めて聖堂に參調する時、天主に感謝するため司祭より祝別式  
 を受けるの習慣がある。之は必ずしも守らねばならぬ掟ではないが、  
 熱信なる婦人は怠らない所である。此祝別式を受けるとき心懸くべき  
 ことは、出産に伴ふ總ての危険を免れ、且幸に子を得たることを天主



に感謝し聖母の手を以て子女を天主に献げて行末良信者となりて親と共に天の福樂を受くるやふ願ふべきことである。

第六章 聖母被昇天の大祝日の事

(八月十五日)

(要略)一、聖會は八月十五日を以て聖母の被昇天を祝ふ聖母の被昇天は、聖母が清淨無垢の生活後其愛徳の厚きために死したること二、三日目に特恩に因りて復活せられたること三、肉体を以て天に昇り、諸天使に勝る位を受けたることなり四、マ

リアの被昇天は感すべきことなり、マリアに對して信任の心を起すの理由となり、マリアの善徳に倣ふやふ勸めるものなり。

(一) 聖母の被昇天は、其感すべき生活を完備するため、天主が彼を天の最上にまで高め給ふたのである。此日は天に於て諸天使が聖母を我元后と稱へて之を祝賀し、地に於て信者は最も盛大に之を祝し、至る所左の如き言を以て賛美す曰く「卒皆主に依りて歡ひ、福なる童貞マリアを崇めて此の祝日を祝はむ、天使は其被昇天を悦び、天主の聖子を賛美す」と。

聖母被昇天は三つのおとを祝するのである。即聖母の御死去、其御復活、其天に上げられたといふことである。耶穌が死し給ふ時弟子等をば聖母に依頼した、故にマリアは其御子



御昇天の時共に天に昇らむとは死するは必ずに熱望する所であつたが其謙遜なる婢の如く全く天主の聖意に任せて此世を逝らしめ給はむ時の至るを待たれた而て其時の來れるは其より凡る廿年を経て後の事であつた此長日月間マリアは耶穌の最も愛せられたる弟子ヨハネの許に住み弟子等の力となり慰めとなり頼みとなりて純潔無垢の生活をなすし毎日聖体を授かり其愛厚き心と行の完全を以て餘功の實を日々積みつゝ居たのである、

マリアは素より罪がないから其罰たる死を免れて可いかと思はれるが救靈の大事業に就て其御子と御苦難を共にしたる如く其御死去をも共にすべき所以によりて死せられたのである然しマリアのためには死が罪の罰でないから他のアダムの子孫の如く病氣苦痛煩悶等が御死去に伴ふ筈はない、マリアを此世に止置くは必ずの力あ

るものは天主の聖意のみである故に天主より此世を去るべく定められたる時が來たならば其心に燃ゆる愛の熱きために死するに至つたのである、されば母として子と共に居りたき望み、聖人として天主の許に行かむの望み、即ち聖母の御死去の原因であつた而て其際には耶穌基督が多くの天使に伴はれて親ら母を迎へ給ひたることに疑ひない、又マリアは之を見るや愛と歡びとに絶えず、我子、我救主、我命なる愛すべき耶穌よ、御身の手に我靈魂を委ね奉る、人の肉を着し給へるとき、我体の中に御身を拜受せしが今は御身の御稜威の中に我を引取り給へといふて耶穌の御見舞を受け而て眠むるが如く靜に其首を垂れ息は絶わたり、其時耶穌は此の福なる靈を引取りて天使の凱歌の中に之を天に上げ給ふたのである、

(二) 古來の尊重すべき傳説に依れば、教を弘めるため萬國に分れたる



使徒等は不思議の如くマリアの最期に集りて其幸なる死に會した。此時居らなかつたは只トマ一人のみである。而て使徒等は天主に感謝しつゝ其潔き御体を最丁寧に葬つた。後三日目に至りてトマも來會せたが彼は聖母の最後に仰することを得なかつたのを嘆いて責めては其御姿だけにても拜さむと思ひ墓を開かむことを請ふた。此に於て使徒等は聖母の墓を開いた然るに不思議なる哉中には御屍に纏はせたる衣服經帷子の残るのみで御体は全く見えない。此不思議なることを見て使徒等は驚て且謂へらく「天主の聖旨によりて耶穌の御体が三日間地の中に止まりたる如く其母の聖き体も同く三日間地の中に止まり而て其靈魂と肉体とを以て永遠の福樂を得たのであらふ」と斯く思ふて天主に感謝し我母に斯くまで榮耀を授け給へる主を賛美しつゝ歸つた。

天主はマンナや十誠の刻しある石表を納むるためにすら朽ちざる木にて聖櫃を造るやふモイゼに命じ給ふた。さればマンナにも十誠の石表にも限りなく勝る耶穌基督を懷孕せられたる救世主の至聖なる血肉となりたる聖母の純潔無垢なる御体が腐敗して虫類の餌食なせにならざるやふ耶穌が御自分に對しても量らひ給ふべき筈である。されば此のマリアの復活に關する總てのことが確實である。とはいひ難けれども事實に疑を容れることは出来ないことである。(三)凡ての聖人が肉体を以て天に昇るよは世の終りの總復活の時を待たねばならぬがマリアは死後三日目に復活して直に其神聖なる御子のために天の最上に上げられたのである。之を聖母の被昇天といふ。さりながら天主の聖母が天に上げられたる時の榮華は之を如何に述べやふかなかゝに筆にも言にも及ばぬことである。耶穌は



親ら天の朝廷の諸天使に伴はれて彼を迎へ親ら御母の傍らに立ちて彼を天に導き聖父の玉座の尊前に伴ひ給ふた諸天使は又た之に随ひ聖子の母の光榮を見て感に堪えず之を賛美して「最愛のものに寄托り悦びに満ちて地の荒野より上るものは誰ぞ」と、  
 マリアは斯く賛められて天の最上へ上げられ天主の尊前に出れば天主は深き寵愛を以て其聖子の母を接待し給ひ諸聖人に優るマリアの功に應ずる無量の賞を與へ給ひ諸天使よりも高き位の上に座せしめ頭には天地の元后たる冠を戴かしめ天使と人との主に定め給ふたヨハネは天に於けるマリアの此御榮を默示されて左の如く述べた「一人の女あり天津日を着て月を足繼にし首に十二星の冠を載けり」と、  
 天主はマリアに斯く最大なる榮を與へ給へると同時に此榮に適へ

る權利を與へ給ふた其權利の大なることは全能者といはるゝはゞである素よりマリアは造られたるものにして自ら何をも成し能はざるが其御子の心を動かすことに就て最愛の母なる力を有し給ふがゆゑに傳達を以て何をも成し得給ふものである且又凡ての人を我子の如く愛し給ふがゆゑに如何なる人でも其保護其傳達を以て凡ての恩恵を求め得らるゝのである嗚呼斯く全能の代願者全愛の保護者を吾等に授け給ひたる天主に誰れか感謝をなさざるものがあらふ。

(四) マリアは其被昇天に於て諸天使の上に高められたる原因は何かといふに天主の母たる位のためよりは其位に適ふはゞの徳を行はれたるためだといはねばならぬ天に於て榮耀に満たされたる所以は世上に於て其謙遜が凡ての聖人に遙に優れて居つたためである、